

平成19年度 事業 報 告 書

同 決 算 書

学校法人 白梅学園

目 次

| | |
|------------------------|-------|
| [1] 学校法人の概要 | |
| 1. 学校法人の沿革・概要 | 1 |
| 2. 設置する学校・学部・学科等 | 2 |
| 3. 入学定員、学生・生徒・園児数 | 3 |
| 4. 組織図 | 4 |
| [2] 事業の概要 | |
| I. 法人本部 | |
| 1. 年初事業計画の振り返り | 5 |
| 2. 財務関係 | 5 |
| 3. 総務関係 | 6～8 |
| II. 白梅学園大学 | |
| 1. 教学・教務に関する執行状況 | 9～10 |
| 2. 教務・学生関係 | 10～11 |
| 3. 学生募集 | 11～12 |
| 4. 事務組織の改善 | 13 |
| 5. 自己点検・評価 | 13 |
| 6. 学生人権擁護 | 13 |
| 7. 就職及び進学の支援 | 13 |
| 8. 図書館の整備・活動 | 13 |
| 9. 情報処理センターの活動 | 13～14 |
| 10. 教育・福祉研究センター | 14～15 |
| 表1) 平成19年度学生在籍数 | 15 |
| 表2) 平成20年度新入学生数（前年度比較） | 16 |
| III. 白梅学園短期大学 | |
| 1. 教学・教務に関する執行状況 | 16～17 |
| 2. 教務・学生関係 | 17～18 |
| 3. 学生募集 | 18～19 |
| 4. 事務組織の改善 | 20 |
| 5. 自己点検・評価 | 20 |
| 6. 学生人権擁護 | 20 |
| 7. 就職及び進学の支援 | 20 |
| 8. 図書館の整備・活動 | 20～21 |
| 9. 情報処理センターの活動 | 21 |
| 10. 教育・福祉研究センターの活動 | 21～22 |

| | | |
|--------------------------|-------|----|
| 11. 短期大学創立50周年記念事業 | ----- | 23 |
| 表1) 平成19年度学生在籍数 | ----- | 23 |
| 表2) 平成19年度卒業者および免許資格取得者数 | ----- | 24 |
| 表3) 平成20年度新入学生数（前年度比較） | ----- | 24 |
| 表4) 平成19年度卒業生就職者数 | ----- | 25 |
| 表5) 平成19年度卒業生就職業種・職種別内訳 | ----- | 26 |

IV. 白梅学園高等学校

| | | |
|------------|-------|-------|
| 1. 学校運営 | ----- | 27 |
| (1)教務・学習指導 | ----- | 27～28 |
| (2)生徒指導 | ----- | 28 |
| (3)進路指導 | ----- | 28～29 |
| (4)保健室の充実 | ----- | 29 |
| (5)修学旅行 | ----- | 29 |
| (6)その他 | ----- | 29～30 |
| 2. 生徒募集 | ----- | 30 |
| 3. その他 | ----- | 30 |

V. 白梅学園清修中学校

| | | |
|-----------|-------|-------|
| 1. 学校運営 | ----- | 31 |
| (1)教務関連 | ----- | 31～32 |
| (2)生徒指導関連 | ----- | 32 |
| 2. 生徒募集活動 | ----- | 33 |
| (1)保護者説明会 | ----- | 33 |
| (2)学習塾広報 | ----- | 33 |

VI. 白梅幼稚園

| | | |
|----------------|-------|-------|
| 1. 園運営について | ----- | 33～36 |
| 2. 大学・短期大学との連携 | ----- | 36 |
| 3. 園児募集 | ----- | 36 |

学校法人の沿革・概要

<沿革>

昭和17年3月 東京家庭学園設立
25年3月 白梅幼稚園設置
28年4月 白梅保母学園を創立、厚生省より保母養成機関の指定
12月 学校法人白梅学園設置
32年4月 白梅学園短期大学設置 保育科第1部、同第2年部開設
36年4月 心理技術科第1部、同第2部開設（現在心理学科）
専攻科保育専攻設置 第2部開設
39年4月 白梅学園高等学校設置（女子普通科）
41年4月 短期大学教養科開設
62年4月 保育科第2部、心理技術科第2部、専攻科保育専攻第2部募集停止
専攻科保育専攻第1部開設
平成元年4月 専攻科福祉専攻（介護福祉士養成施設）開設
4年4月 専攻科福祉専攻、学位授与の認定
5年4月 専攻科保育専攻、学位授与の認定
保育科第2部、心理技術科第2部、専攻科保育専攻第2部の廃止
保育科第1部を保育科、心理学科第1部を心理学科、
専攻科保育専攻第1部を専攻科保育専攻と名称変更
平成10年3月 専攻科保育専攻1年課程廃止
4月 専攻科保育専攻2年課程開設
福祉援助学科（介護福祉士養成施設）開設
17年4月 白梅学園大学子ども学部子ども学科設置
短期大学教養科募集停止
専攻科保育専攻募集停止
18年3月 短期大学教養科廃止、専攻科保育専攻廃止
18年4月 白梅学園清修中学校設置

<概要>

本学園は、創立者小松謙助氏が財団法人社会教育協会（大正15年設立）の教育活動の一環として昭和17年に文京区に設立した東京家庭学園に始まる。

以来、戦中戦後の荒廃と苦難を乗り越え、建学の精神である人間復興の道を歩み、昭和28年には杉並区馬橋に白梅学園が誕生し、ついで昭和28年12月には学校法人白梅学園として独立し、白梅保母学園と白梅幼稚園とを設置した。昭和30年には白梅保母学園を白梅学園保育科と改称し、さらに昭和32年白梅学園短期大学を設置して、今日に至る。

保育科について、昭和36年に心理技術科（現在心理学科）、昭和41年には教養科、平成10年には福祉援助学科を増設し、総合的な教育の場として発展をとげてきた。

白梅学園短期大学は、その間昭和39年に幼稚園（昭和25年創立）とともに小平市小川町の現在地に移転し、それを機会に昭和39年には白梅学園高等学校を併設して、一貫教育の道を開いた。

平成17年4月には、四年制の白梅学園大学子ども学部子ども学科を開設し、さらに高度な教育の場を提供している。

平成18年4月には、中高一貫部で女子教育を行う白梅学園清修中学校を設置した。

設置する学校・学部・学科等

1. 白梅学園大学

子ども学部 子ども学科

2. 白梅学園短期大学

保育科
心理学科
福祉援助学科
専攻科 福祉専攻

3. 白梅学園高等学校

4. 白梅学園清修中学校

5. 白梅学園大学附属白梅幼稚園

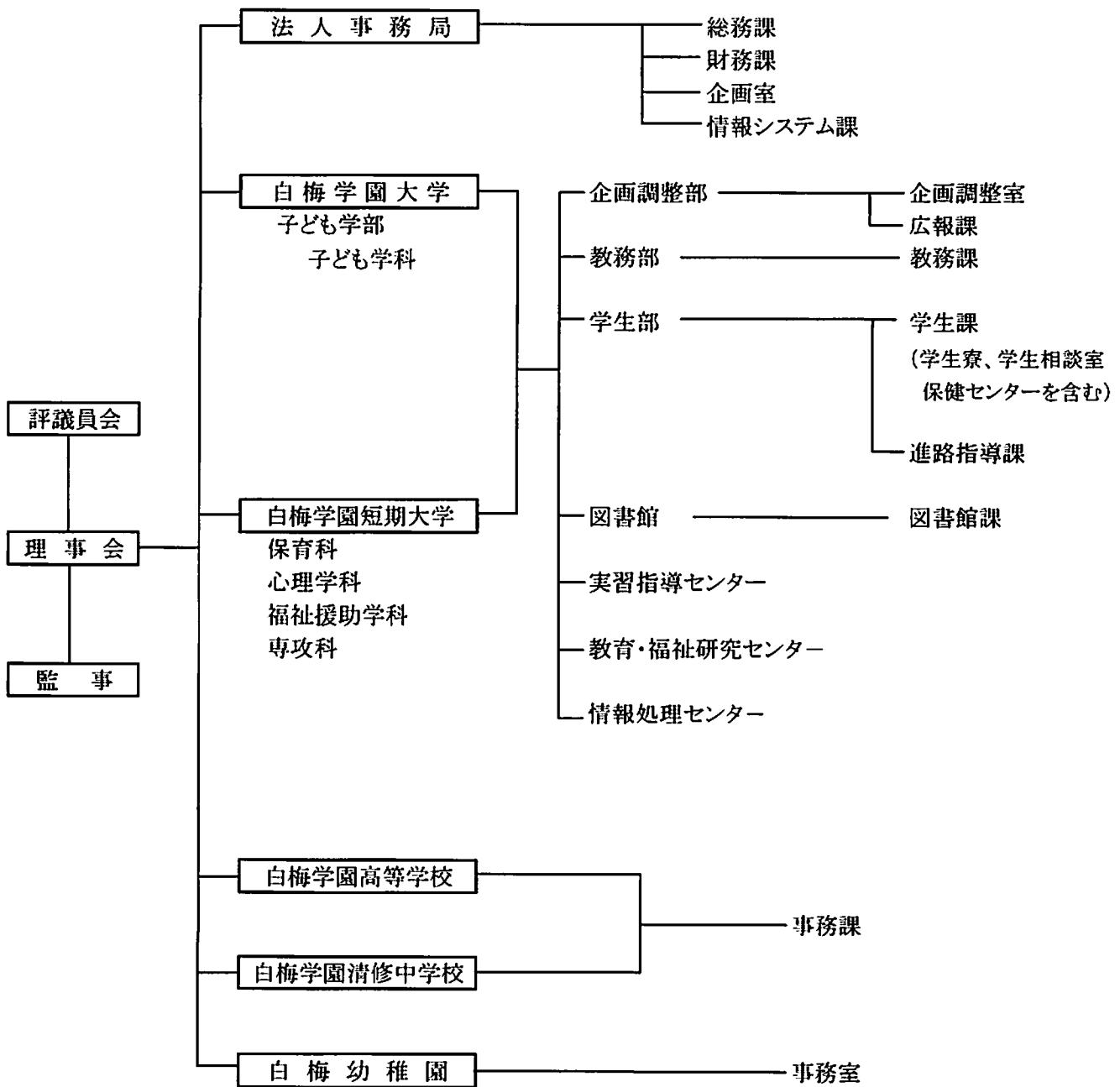
入学定員、学生・生徒・園児数

平成19年5月1日現在

| | 学部・学科名等 | 定 員 | | 現 員 | | | | 合計 |
|------|--------------|------|-------|-----------|-----------|---------------------|----|-------|
| | | 入学定員 | 収容定員 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | |
| 大 学 | 子ども学部 | | | | | | | |
| | 子ども学科 | 120 | 500 | 133 | 135 | 150 (編入学 6名含) | | 418 |
| | (〃 3年次編入学定員) | 10 | | | | | | |
| | 大学 計 | 130 | 500 | 133 | 135 | 150 | 0 | 418 |
| 短 大 | 保育科 | 130 | 260 | 133 | 111 | | | 244 |
| | 心理学科 | 70 | 140 | 62 | 69 | | | 131 |
| | 福祉援助学科 | 80 | 160 | 65 | 65 | | | 130 |
| | 専攻科福祉専攻 | 40 | 40 | 16 | | | | 16 |
| | 短大 計 | 320 | 600 | 276 | 245 | | | 521 |
| 高等学校 | | 340 | 1,020 | 264 | 265 | 329 | | 858 |
| 中学校 | | 60 | 180 | 74 | 57 | | | 131 |
| 幼稚園 | | 100 | 300 | 3歳児 55 | 4歳児 74 | 5歳児 60 | | 189 |
| 合 計 | | 950 | 2,600 | 802 | 776 | 539 | 0 | 2,117 |

組 織 図

(平成19年5月1日現在)



[I] 法人本部

1. 年初事業計画の振り返り

白梅学園大学大学院子ども学研究科子ども学専攻（修士課程）は、正式認可を得て、社会人を中心に定員を上回る人数を迎えることができました。また、施設・設備についても大学院合同研究室を設け、コンピュータを整備し貸出も可能にしました。夜間開講のため図書館開館の準備を行いました。

大学完成年度後の新たな学科の増設は検討を重ねた結果、平成21年度に子ども学部に新たに「発達臨床学科」を開設するため、220名を増員する定員増の申請を行いました。

施設の整備では、幼稚園舎の改築、中学・高校校舎改築Ⅱ期工事の取り組みは、短大の定員割れを生じた学科の改編構想もあり、自己資金との関係から、着手の時期などさらに検討を重ねる必要がでてきました。他に大学の講義室のAV装置の整備を行いました。

他校との連携では、白梅学園、創価学園、武蔵野美術大学、津田塾大学の四学校法人は「鷹の台地区学生生徒通学安全環境推進協議会」を発足し活動を行っています。その一環として玉川上水の通学路に安全ボックスが完成し、学生生徒の防犯や事故防止にあたっています。

2. 財務関係

消費収支の「収入」につきましては、大学は、入学定員を極力遵守する方向で取り組み、入学者数は133人となりました。短大保育科は30人の定員増により入学者は133人となりましたが、その他の学科と専攻科は定員割れとなりました。しかし、大学が3年目となり短大・大学の学納金は116百万円の増収となりました。高校の募集は264人の入学者で、清修中学校は厳格な選考入試を行いつつ、定員を上回る74人の入学となりました。この結果、中学・高校で32百万円増、幼稚園は減収となりましたが、合計137百万円増の1,864百万円となりました。補助金は、大学・短大のGP採択と中学の増員で72百万円の増収となり、受験生の減少で手数料が減少しましたが、帰属収入全体で181百万円増の、2,749百万円となりました。

支出面では、中学と大学が学年進行に合わせて教員を増員しましたが、職員は退職者の後任に若手を採用したことや、退職与引当金繰入額の算出の変更により、人件費は38百万円減少しました。募集経費も抑えることにより管理経費は22百万円減りましたが、大学のGP補助費の増加もあり、教育研究経費が34百万円増加しました。この結果、消費支出合計は対前年度比5百万円増の2,654百万円となりました。

基本金は、校地・校舎、借入金返済額、図書購入費分である1号基本金が主な組入れ対象となります。新築校舎とその什器・備品購入は、今年度は借入金で賄うため組入れ対象とはならず、最終組入額は121百万円となり、この結果、「基本金組入後消費収支」は26百万円の支出超過となります。

資金収支では、収入合計は3,183百万円で前年度に比べて270百万円の増加となり、年間で動く現金が3,000百万円を超える規模になりました。翌年度繰越しは、1,080百万で、ほぼ前年度額を維持しています。

次に、貸借対照表の資産の部につきましては、固定資産は、特に目立つ新規の増加はありませんが、減価償却積立て分との相殺で固定資産は100百万円を超える減少となっています。

その他の固定資産は、GP採択により新宿にサテライトを借りたことと長期貸付金が増加したことにより10百万円増加しました。流動資産は財團からの未収入金と有価証券の減により49百万円減少し、資産全体では150百万円の減となりました。

負債の部につきましては、借入金の返済が進んだことと、退職給与引当金の減少で245百万円の減となりました。この結果「総負債比率」は29.0%と3.7ポイント改善しました。消費収支差額（累計支出超過）は2,461百万円の支出超過で、「基本金・消費収支差額合計額（自己資金）」は3,802百万円となり、総資産に対する割合（自己資金比率）は、71.0%と3.7ポイント改善しました。

3. 総務関係

(1) 平成19年度理事、監事、評議員の状況

①平成19年度 4月1日現在

| 理事・監事 | | 評議員 | | | |
|-------|--|-------|---|-------|--|
| 1号理事 | 無藤 隆(10月9日退任) 平賀明彦 秋田中子 田村敦彦 | 1号評議員 | 無藤 隆(10月9日退任) 平賀明彦 秋田中子 金田利子 田村敦彦 | 3号評議員 | 松永輝義 中村 健 増田昭一 浅倉静子 野口桂子 佐藤信子 |
| 2号理事 | 上木光夫 澤井敏和 柴田哲彦 金田利子 | 2号評議員 | 関谷榮子 八木紘一郎 久保木壽子 民秋 言 上木光夫 柴田哲彦 松本 匡 土門久美子 西田末夫 | 4号評議員 | 鈴木三男吉 中島百合子 西口栄一 澤井敏和 大山美和子 谷 美智子 高橋康昌 稻田百合 竹谷廣子 |
| 3号理事 | 小松隆二 門上千エ子(8月6日退任) 山田美和子 上野保之 横田吉男 海上玲子 | | | | |
| 監事 | 阪谷芳信 長倉 澄(11月13日退任) | | | | |

②平成20年3月31日現在

| 理事・監事 | | 評議員 | | | |
|-------|--|-------|--|-------|--|
| 1号理事 | 汐見稔幸(10月10日就任) 平賀明彦 秋田中子(3月31日退任) 田村敦彦(3月31日退任) | 1号評議員 | 汐見稔幸(10月10日就任) 平賀明彦 秋田中子(3月31日退任) 金田利子 田村敦彦(3月31日退任) | 3号評議員 | 松永輝義 中村 健 増田昭一 浅倉静子 野口桂子 佐藤信子 |
| 2号理事 | 上木光夫(3月31日退任) 澤井敏和 柴田哲彦 金田利子 | 2号評議員 | 関谷榮子 八木紘一郎 久保木壽子 民秋 言 上木光夫(3月31日退任) 柴田哲彦 松本 匡 土門久美子 西田末夫 | 4号評議員 | 鈴木三男吉 中島百合子 西口栄一 澤井敏和 大山美和子 谷 美智子 高橋康昌 稻田百合 竹谷廣子 |
| 3号理事 | 小松隆二 山田美和子 上野保之 横田吉男 海上玲子 長倉 澄(11月13日就任) | | | | |
| 監事 | 阪谷芳信 石川 武(11月13日就任) | | | | |

(2)人事の異動

学内人事につき省略

(3)理事会、評議員会の開催状況及び議題

理事会

- 平成19年5月22日 平成18年度事業報告及び決算の件、大学院設置による寄付行為
変更の件、大学学則変更の件
- 7月10日 平成20年度学費及び検定料の件、大学院開學に先立ち研究科教
授会を代行するメンバー指名の件
- 9月25日 短大・大学学長人事の件、大学院学則変更の件、園則変更の件、
懲戒委員会規程の件、短大教員懲戒の件、門上理事後任の件
- 10月9日 学長人事の件
- 11月13日 理事選任の件、監事選任の件、大学院設置準備委員会解散の件
- 12月11日 大学学科増の件、中学校校長及び高校校長任命の件
- 平成20年3月11日 平成19年度補正予算の件、平成20年度事業計画及び予算の件、
短大学長任期延長の件、平成21年度大学学則変更の件、発達臨
床学科設置届出に伴う寄付行為変更と心理学科募集停止の件、
平成20年度大学学則変更の件、平成20年度短大学則変更の件、
大学院研究科長交代の件、平成20年度大学院入学者選考の件、
事務局長人事の件、秋田中子校長への「学事顧問」称号授与の
件、平成20年度理事会開催日程の件

評議員会

- 平成19年5月22日 平成18年度事業報告及び決算の件、大学院設置による寄付行為
変更の件
- 10月9日 学長人事の件
- 平成20年3月11日 平成19年度補正予算の件、平成20年度事業計画及び予算の件、
短大学長の任期延長の件、発達臨床学科設置届出に伴う寄付行
為変更と心理学科募集停止の件、平成20年度評議員階開催日程
の件

なお、常勤理事会は下記の日程で開催しました。

- 平成19年4月9日、5月14日、6月25日、7月9日、9月10日、10月15日、11月12日、
12月10日
- 平成20年1月21日、2月18日、3月10日

(4) 専任教職員数（平成19年4月1日現在）

| 職種 | 人數 | | 前年度差 | 備考 |
|---------|--------|--------|------|----|
| | 平成18年度 | 平成19年度 | | |
| 大学教員 | 19 | 21 | + 2 | |
| 短大教員 | 20 | 22 | + 2 | |
| 大学・短大共通 | 6 | 7 | + 1 | 助教 |
| 高校教諭 | 45 | 43 | - 2 | |
| 中学校教諭 | 7 | 13 | + 6 | |
| 幼稚園教諭 | 12 | 12 | 0 | |
| 事務職員 | 41 | 40 | - 1 | |
| 計 | 150 | 158 | + 8 | |

〔II〕 白梅学園大学

1. 教学・教務に関する執行状況

(1) 4年制大学の開設3年目を迎え、カリキュラム運営に関して、履修指導のあり方や時間割編成について幾つかの問題点が出てきたことについて、適切に対処するための手立てを講じました。とくに2年次の時間割に余りにもゆとりがなく、学生の学習に支障を来たす場合があるので、開講時期の変更などを検討しました。また、資格取得についての方向性が不明確なままに多種の資格にチャレンジすることにより、履修過多の弊害が現れていますことに対し、各年次での履修指導に際して、無理のない履修をこころがけるように指導を強めることとしました。これらはいずれも完成年度前にできるマイナーチェンジに類することですが、さらに大きくカリキュラムに変更を加えなければならないような問題点について、完成年度以降の大幅改編を視野に入れて準備作業を開始すべく、学科内の体制づくりを行いました。

また、次年度いよいよ実習生を送り出す教職課程の指導体制を強化するために、教育実習について主として担当し得る人材を新たに専任スタッフとして採用する人事を起こし、准教授を採用しました。

(2) 大学院の開設をひかえ、その準備を進めました。入試日程を立て、各種の選別を行った結果定員15名に対し20名の入学者を迎えることを決め、時間割編成、合同研究室の整備、院生生活の支援及び福利・厚生面での環境整備などを行いましたが、不十分な部分もあり、開設後の状況を見ながら整えていく必要があります。

(3) 毎週定例で開いている執行会議では、日常的な課題とともに、将来的な学科運営のあり方についても検討を進め、とくに、6人の退職者がいる平成21年度以降の人事構想について素案づくりに取り組みました。

また、短期大学の抱える課題についても同様に検討を進め、すでに設置していた4大化構想のプロジェクトチームの答申と法人の財政状況の摺り合わせを行いつつ、届出による新学科増設の方向性を固め、新たに子ども学部発達臨床学科の設置に向けて種々の届出及び申請を行いました。また、それにともなう新任人事及び学内での教員配置についても検討を加え、新学科の陣容を確定するとともに、他学科の配置変更計画も決定しました。

(4) 地域に開かれた大学をめざす取り組みもさらに強め、また、他大学、教育機関との連携強化にも努めました。とくにGPとして「資質の高い教員養成プログラム」に採用された東京学芸大学とのコンソーシアムで行ったメンタリングを生かした取り組みは、完成年度をむかえ、私立大学ー私立幼稚園の連携の下に一定の成果をあげた点を中心にまとめを行いました。また、「特色ある大学教育支援プログラム」として採用された「子育て広場」を中心とした取り組みは、2年目をむかえ、学生参加の環境を整えるために単位化した科目を設け、さらに取り組みを強化し、成果をあげることができました。

また、本学の教育を広く地域に発信する活動の一環として、公開講座の開設や科目等履修による授業の開放、あるいは他大学や教育機関との連携による単位互換を進め、とくにネットワーク多摩が推進する高校生対象のチャレンジキャンパスプログラムでは、協定書を結びより強い結束の下で推進していく体制を整えました。

本学の研究・教育の成果を広く情報発信するための試みの一つとして始めた仙台、新潟、横浜での本学教員を中心とした保育・教育に関する講演会は、本年度も実施し、多くの参加者を集めました。白梅学園の知名度をあげる広報活動の一環でもあり、今後も継続乃至は拡大していくことが重要であろうと考えられます。

(5) 学士力と言った表現が使われるようになった学部教育のあり方については、多様なニーズに応えるための豊かな教育内容や、それをプランニングし実践する教職員スタッフの能力の向上が求められています。そのため、教育方法や実務能力を高めるためのFD、SDの取り組みが重視されており、それについても意を用いましたが、今年度は短期大学の第三者評価、監督官庁による指導調査、さらには新学科開設に向けての申請作業が折り重なる中で、時間的制約が多く、結果的に1回のFD研修会しか開けませんでした。カウンセラーの助教を講師とし、学生支援体制のあり方について学び、検討を進める会には、

全教員の参加を原則とし、内容の濃い会となりましたが、今後は、年度内の回数をさらに増やしていくこととともに、研修会スタイルだけではないFDのあり方について検討を進め、実施していくことが課題として残りました。

(6)自己点検・評価では、とくに教学部門では、その中心となる授業評価について、演習など一部授業を除いて、全科目での完全実施を達成し、授業改善に取り組むとともに、その結果報告、及び分析内容を学生に開示することを行いました。しかし、上記のような時間的制約の中で、それを冊子としてまとめるところまでは至りませんでした。目下編集中ですので、なるべく早く刊行し内外への開示を行う必要があります。

(7)各種実習に関する業務を統括し、また実務を担う組織である、実習指導センターの整備充実に意を用いましたが、小学校教諭免許に関する実習等がさらに増える中で、現スタッフや事務体制では十分対応できないところも現れてきており、内部における指導体制の効率化とともに、人員増も含めた環境整備の面でも課題を残していると考えられます。

2. 教務・学生関係

(1) 学生数

平成19年度は子ども学科3年生は150名、2年生は135名1年生は133名でスタートしました。尚クラスはそれぞれ3クラスで担任教員を配しました。

(2) 教育課程と教務事項

①学事日程の編成と授業週数の確保

平成19年度の学事日程は従来と大きな変更点はありませんでしたが、前年来、授業回数の15回遵守、指定科目のクラス分割等について厳密な履行が迫られるなか、とくに春季、夏季、冬季休業期間の設定などかなり難しいスケジュール管理を求められることになりました。また、新たな課題として各種実習時間の設定に仕方についても従来の解釈とは異なった実時間の確保等が要請されており、それらを仔細に検討し、学事日程の中に反映させていくことが必要となります。

②授業方法の改善と教育機器等の環境整備

より効果的な授業方法等を目指してFD等の取り組みがなされ、情報機器等を活用した授業展開の工夫が取り組まれています。他方、教育機器等の更新や設備改修の面で充実が図られる必要がありますが、補助金の採択などとの関係で十分な財政的裏づけが得られない中で、必要度の高いものから重点配備するなど、計画的な取り組みが急がれています。

③適正な入試の実施について

監督官庁から入学定員遵守が厳しく求められる中、今年度から入学者の最終調整を目的としたⅣ期入試を実施しました。他大学との競合関係などの入試データの蓄積がまだ不十分なこともあって、時々の入試時点での歩留まり計算など難しい局面もありましたが、最終調整の結果、定員遵守をほぼ達成した結果となりました。

入試問題の出題ミスは残念ながら今年度も幾つか出しましたが、いずれも合格者発表以前の修正により、大きな問題なくクリアできましたが、以後は、さらに厳重な注意を払って作成に努めるとともに、チェック体制の強化にも合わせて取り組み、さらに、入試判定教授会の開催や、合格発表日時を変更し、ミス対応が可能なスケジュールを組むことにしました。

しかし、これら出題ミスは、一部の出題担当者への過大な負担などが原因となっており、それに対する抜本的な対策が検討されねばならず、今後の課題として残されています。

④科学研究費採択と事務管理体制の整備

ここ数年、科学研究費をはじめとする、いわゆる「競争的資金」の採択が増えつつあります。平成19年度は新規採択が1件ありました。今後もさらに申請件数、採択件数の増大を目指していきますが、「公的研究費」の機関管理のルールや体制づくりについて監督官庁から整備の要請が来ており、それに応える形で補助金管理の部署などを適宜変更し、専門化するとともに、運用に関する倫理規程なども整備しました。

(3) 学生生活の支援

近年、心身の不健康な学生、深刻な問題を抱える学生が増加しており、保健センター室、学生相談室の果たす役割はますます大きくなっています。

保健センター室は、救急処置・保健指導・健康相談の他に栄養指導・性教育等の健康教育を実施し、学生相談室は学園生活についてのあらゆる相談に応じました。相談内容により医療機関との連携を必要とするケースも増えています。

保健センター運営委員会主催による「心と体のセミナー」(プロによる集団運動教室、個別運動相談、栄養相談)を今年度は3回実施しました。管理栄養士による栄養相談を1回実施しました。さらに喫煙の弊害について正確な認識を深め、それを共有することを目的として講習会を開催しました。これらの活動を通して、学生の健康に関する自主管理を促すものとして実績を上げています。

子ども学部の学生のそれぞれの利用状況は以下の通りです。

(保健センターの利用状況)

- ・救急処置 511件 ・健康相談 216件 ・健康教育 52件
- ・その他 99件 合計 878件

(学生相談室の相談内容別利用件数)

適応障害480件、対人関係22件、家族問題18件、進路相談9件、その他23件、親利用10件 総件数 562件

多種類の資格取得を希望する学生は、2年次、3年次でかなりハードな授業履修と実習を経なければならず、その負荷もあって、心身のバランスを崩す事例が多く、スタディケアの充実とともに学生相談室機能の整備が急がれていました。いずれにしても年度中に新たな取り組みを開始することができませんでしたが、次年度に向けて幾つかの準備を整えることができました。学生相談室については、常勤のカウンセラーに加え、週2日だが、補助者を新たにスタッフとして加え、より多様な学生のニーズに応えられる体制を整え、また相談室も2室を確保し、希望学生へのより良い対応が可能な環境を準備しました。スタディケアの面では、従来の学習支援室に加え、前教員が交代で学生の学習相談に対応する体制づくりを進め、シフトを組んで相談に応じるシステムについて検討を進めました。

学生寮(若葉寮)については、寮生の自主自立を基にした共同生活の確立をめざす必要性を感じ、寮生との話し合いを通じその指導に配慮しました。

学報「プラムタイムス」(9月、3月刊行)は後援会員や同窓会全国支部にも発送され、学園の近況報告とともに情報交換の場にもなっています。

学資の援助を必要とする学生が昨年度に続いて増加し、今年度奨学生の受給者は137名でした。在籍数に対する奨学生の割合は33%でした。

3. 学生募集

(1) 志願者数の状況について

子ども学部子ども学科は、総数で659名と入学定員に対して5.5倍の志願者を得ました。前年比較で倍率は低下しましたが、この分野への志願者減少傾向、早稲田や東洋など大規模大学の参入、競合学部学科の増設ラッシュを勘案すると、厳しい数字ではあるが最低限の存在感は示したと考えられます。指定校や推薦入試の志願者が減少した理由として、偏差値上位高校(とりわけ私立)での進路指導が、所謂国公立難関私大の入試易化を受けてより上位の大学へのランクアップを視野に入れ、一般入試やセンター試験利用へと指導を方向転換している背景があります。その意味で今後の指定校戦略は大幅な見直しが必要と考えられます。但し、高校ランクと評定値平均では全般的に前年度と同等か若干の上昇がみられるので、徒に指定校の高校ランクを下げるなどの対応は慎重な判断が必要と考えられます。さらに一般入試でいえば、幼・保・小という免許・資格が取得できる大学が増えた今、本学の特色や教育資源について十分な差別化を訴求できなかったくらいが課題として残ります。子ども学部大学の将来的な淘汰を踏まえ、長期的な展望をもった戦略構築が必要な局面でしょう。また、次年度はじめての卒業生が出ますが、進路実績如何では

募集広報にも影響が考えられるので、その重要性をアピールしていきたいと考えています。

なお、男子生徒の志願減、女子生徒の併願校で女子大の顯著なることを勘案すると、本学部のイメージと方向性の再確認も今後の検討課題です。

同窓生入試は、志願者4名に対して2名の合格であり、3年次への編入学については制度の周知が浸透したことも相俟って、内外から多数の志願者があり、15人の入学者を得ました。

(2) 制作物について

メインの制作物である年度版「ガイドブック」は、四大版と短大版をそれぞれ独立冊子として制作しました。これは、進路指導の日程や訴求点が異なることを勘案し、機動的な対応を図るための措置です。配布先は高校、生徒、予備校、同窓会員などでしたが、その一方WEB媒体を介した直接請求も増加しつつあります。

一方、本年は新聞などとのタイアップも試み、たとえば「学長インタビュー」というような形で本学の方向性や特色などを発信することにも注力しました。

(3) ホームページについて

本学は、白梅学園の名の下に、四年制大学、短期大学、高等学校、清修中学校、幼稚園が併設されていて、HPに関しても総合的な教育機関として全容が把握できる構成となっています。そのための一長一短はありますが、スケールメリットを謳える要素は看過できません。大学・短期大学ページにおいては、適時に入試案内や行事告知を実施するなどし、また更新頻度の向上に努めました。

(4) 相談会・高校内ガイダンス・出張講義について

多くの教職員の協力を得て、会場相談会(40か所)、高校内ガイダンス(88か所)、出張講義(9か所)等に積極的に参加し、直接、受験生に説明する機会を重視する姿勢で取り組みました。また、本学独自の高校教員向け相談会を立川、新宿、横浜、三会場で実施し、送る側受入側という双方向の情報交換ができる場として機能しています。

(5) 高等学校・予備校訪問について

広報課プロパーによる高校訪問は、地方入試の実施を踏まえ、東日本の広範な地域をカバーしました。東北81、北陸4、中部35、甲信越51、関東147校、合計281校実施しました。また、教職員の応援を得て、全学的な高校訪問を平成19年5月～6月、平成19年11月、の2回にわたり243校実施しました。この訪問は、主に首都圏「進学校」を中心とした四大志願者の基盤拡大を意図したものでした。

(6) オープンキャンパスについて

近年はオープンキャンパス参加を授業の一環とする高校もあり、募集関連行事としての比重はますます高まっています。また、数年来保護者同伴の参加も増加の一方です。これに呼応し、体験授業や予備校講師による入試対策講座、現職による職業理解の講演などの定番に加え、理事長・学長の講演会など、小規模大学の利点を生かした企画を取り入れ内容上の工夫を図りました。また、学生サポーターによる体験談や学内ツアーなど、従来以上に学生参加型のオープンキャンパス運営を目指しました。

なお、動員に関しては、7月前期の開催では台風による影響があったものの、それ以外は前年並みの数字を確保しています。

日程別参加人数は、6月10日(日)181名、7月15日(日)157名、7月22日(日)415名、8月1日(土)597名、10月7日(日)205名、11月25日(日)120名でした。

(7) 白梅学園高校との関係

併設高校と協同した、一年生対象の施設見学会、二年生対象の体験授業、学長・学科長による保護者向説明会などを実施しました。また、特別推薦合格者に講義形式の講座を1月中に3回開催し、さらに保育系の合格者については「子育て広場」イベントへの参加、福祉系にはボランティア活動への参加を課すなど実践的な入学前指導を行いました。今後も、新学科構想の説明など機会を捉えた適宜な対応を図ることを心がけると共に、白梅学園高校生への施設見学会実施やチャレンジキャンパスへの受け入れを積極的に行い、総合学園として一貫性のある連携指導をさらに拡充させていく必要があると思われます。

4. 事務組織の改善

事務部門では、平成19年度は、通常の学事、学生支援の業務に加え、大学院の開設準備、子ども学部新学科開設に向けての申請作業に多くを割くとともに、科学研究費等の補助金対応の業務、学外への情報発信や地域連携の動きに対応した業務などに力を注ぎました。

大学事務職員の資質向上のための取り組みとしては、各部署ごとに関連の研修会に積極的に参加し研鑽に励みました。

5. 自己点検・評価

昨年度「白梅学園大学自己点検評価報告書（平成17年度）」をまとめました。今年度も引き続き「白梅学園大学自己点検評価報告書（平成18年度）」の作成を進めましたが、年度中にまとめ切ることができず、目下編集中ですので、早急に作業を終え、学内外への開示を進めたいと思います。

授業アンケートについても昨年度完全実施に踏み切ったことを受けて、前期と後期に実施し、結果について学生に報告をしました。自由記述欄については全て電子データ化して教員に返却し、より客観的に授業を評価できるように工夫しています。しかし、結果報告は行いましたが、報告書としての取りまとめは遅れしており、早急に作業を終えるよう努力したいと思います。

授業アンケート実施状況 （実施授業科目数）

前期 7／4～7／10

後期 12／3～12／8

6. 学生人権擁護

年度当初のオリエンテーションで、各科全学年に「セクシャル・ハラスメント防止ガイドラインー相談の手引きー」を配布し、人権についての注意を喚起しました。また7月17日、全学科1年生を対象に、「加害者にも被害者にもならないためにーセクシャルハラスメントと人権ー」と題して講演会（武田万里子 津田塾大学教授）を実施しました。旧規程およびガイドラインの見直しをしました。

7. 就職及び進学の支援

進路指導課では、学生の就職支援に対して、3年生を対象に前期に9回、2月に1日進路ガイダンスを実施、また、進路相談を行いました。就職に関する資料、資格に係わる資料等の情報提供のため第1・第2就職資料室の充実をはかっています。

8. 図書館の整備・活動

平成19年度は各学科に役立つ情報・資料の充実を図りながら、平成20年4月の大学院開設のための図書（洋書214冊・和書50冊）雑誌等の発注・整備を行いました。

設備については、あらたに地下に2台の検索用のコンピュータを設置し、利用サービスの向上に努めました。

教養科図書選及三年計画の最後の年度として、1,600冊の選及を実施し、教養科図書選及は、ほぼ完了しました。その結果重複図書は、総計で2,819冊11,573,466円となりました。なお、平成18・19年度に選及した重複図書1,900冊を年度末に廃棄処分しました。

また11月には、立川市若葉町在住の児童文学者、清水たみ子氏より図書・雑誌・絵画・その他資料等の寄贈を受け入れました。

花みづき第21号を発行しました。

9. 情報処理センターの活動

平成19年度もコンピュータ教育のための研究と実践活動に力を入れるとともに、情報化に対応したコンピュータ利用環境の整備のために、コンピュータ、ネットワーク機器、ソフトウェアの・維持・管理・更新に勤めました。特に今年度は、昨年度末でリース期間を終えた教育用コンピュータシステムの全面的な入れ替えを行いました。同時に、耐用年数をすでに超えているメールサーバやウェブサーバなどのサーバ類を新しいものに更新しま

した。

対外的には、社団法人私立大学情報教育協会の業務に、短大部門の運営委員として参加し、大学における情報教育の普及に協力しました。

また、「第7回白梅コンピュータアートコンテスト」を実施し、「白梅学園大学・短期大学情報教育研究」第11号を刊行しました。

10. 教育・福祉研究センター

教育・福祉研究センターは研究の推進および地域サービスをめざして次の事業を実施した。

(1) 平成19年研究助成

特定課題研究 大学「子どもと現代」短期大学「家族と社会」を含め、以下13件、550万（内50万円が学術研究振興資金より助成）で取り組みました。

- ①鈴木慎一郎「師範学校の保育者養成機能と音楽教育実践に関する史的研究：佐藤吉五郎『和音感教育』との関連から」〔14万〕
- ②荻野七重「言語連想における時代的変化の検討－小・中学生について－」〔48万〕
- ③金子尚弘「マウスを用いた脳の記憶機能に関する研究」〔44万〕
- ④佐々加代子（子どもと現代）「幼稚園教育における発達臨床型保育内容研究」〔38万〕
- ⑤瀧口優（子どもと現代）「公立小学校英語教育特区の分析から見た学童期の英語教育」〔20万〕
- ⑥林薰（子どもと現代）「大学における異世代交流教育授業の効果の検討『高大連携の家庭科教育の検討から』（継続）」〔15万〕
- ⑦中山正雄「児童福祉施設における家庭支援の役割が及ぼす今後の児童福祉のあり方にについて」〔37万〕
- ⑧佐野英司「福祉実践のあり方についての研究－獲得目標と福祉実践の関わりをめぐつて（その2）一」〔15万〕
- ⑨関谷栄子「介護福祉実践における『ホスピタリティ』の応用」〔23万〕
- ⑩西方規恵「福祉援助と『遊び心』」〔16万〕
- ⑪八木紘一郎「子ども文化創造研究『未来世代（子ども・学生たち）自身による文化創造への課題と可能性について』～『こども新文化フォーラム』企画開催を通して～」〔60万〕
- ⑫山路憲夫「『だれもがともに』 サポータープロジェクト－地域の医療機関、NPO、親の会との協働により発達障害児を支援する人材養成－『現代GP申請に基づくともにネットワークメンバー』」〔70万〕
- ⑬金田利子「子育て支援ネットワークづくりに関する研究」〔150万〕

(2) 研究年報

「研究年報」第12号を発刊しました。（平成19年7月31日）

(3) 公開講座の報告

- ①第9回 生活の中のカウンセリング 「子どもとのかかわりの基本について考える」
全5回 講師名、平木典子、岸田博、金田利子、汐見稔幸、岡健、無藤隆
参加者延人数：580名 会場：白梅学園大学
- ②平成19年度 第7回保育フォーラム 「保育変革の時代を考える」
日程：平成19年6月9日（土）
講師名：無藤隆、民秋言ほか
参加者数：203名 会場：財）津田塾会
- ③世代間交流コーディネーター養成講座
日程：平成19年8月3日（金）、8月11日（土）、8月24日（金）
講師名：草野篤子、金田利子、多湖光宗、杉啓以子

参加者数：20名 会場：白梅学園大学
実習会場：東京都江戸川区社会福祉法人「江東園」

④第4回家庭科の保育と保育者養成の保育をつなぐシンポジウム

「中高生とのふれあいは乳幼児に何をもたらすか」

日程：平成19年10月6日（土）

講師名：倉持清美、井口眞美、大山美和子、阿部睦子、石島恵美子、伊藤亮子、
金田利子

参加人数：52名 会場：白梅学園大学

⑤白梅子ども学講座「子ども学の可能性－子どもたちの未来に向けて－」（子ども学研究所との共同開催）

全5回 講師名：汐見稔幸、八木紘一郎、無藤隆、小林美由紀、新堀学

参加者延人数：139名 会場：白梅学園大学

⑥第13回白梅保育セミナー

「いま保育に問われていること遊びを通してとらえる『現代』の子ども～家族・地域
を視野に入れて～」

日程：平成19年12月2日（日）

講師名：無藤隆

幼稚園分科会：師岡章、小松歩、明石陽子

保育所分科会：近藤幹生、佐久間路子、高田あゆみ、大橋隼人

施設分科会：中山正雄、西村章次、荒井麻紀、相田大

参加者数：73名 会場：白梅学園大学

⑦第6回 白梅介護福祉セミナー

「コムスン問題はなぜ起こったか？これからの高齢者介護を考える」

日程：平成19年2月3日（日）

講師：日野力、新田國夫、水谷和美、細谷英正、萩谷洋子、比留間毅浩

参加者数：55名 会場：白梅学園大学

（4）現代GP「アートでつくる障害理解社会の創成」

本プロジェクトが文部科学省平成19年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択されました。プロジェクトには白梅学園大学・短期大学学生も参加し、ワークショップや親キャラバン隊等の取組を行われました。

採択取組名称 「アートでつくる障害理解社会の創成」

平成19年度には本取組に23,854千円が補助交付されました。

（5）発達・教育相談室

発達・教育相談室での相談事業を再開のため、各担当、関連部署等と連携を行い受付体制の定着とともに環境、設備の整備を行いはじめた。

表1) 平成19年度学生在籍数（平成20年3月1日現在）

（人数：名）

| 学 科 | 学 年 | 人 数 |
|------------|-----|-----|
| 子ども学部子ども学科 | 1 年 | 132 |
| | 2 年 | 131 |
| | 3 年 | 149 |
| 合 計 | | 412 |

表2) 平成20年度新入学生数(前年度比較)(平成20年4月1日現在)
(人数:名)

| 学科 年度 | 平成19年 | 平成20年 | 増減 |
|----------------|---------------------|----------------------|----|
| 子ども学部 子ども学科 | 139 (3年次編入生6名含む) | 136 (3年次編入生15名含む) | △3 |

〔III〕白梅学園短期大学

1. 教学・教務に関する執行状況

(1) 4年制大学の開設3年目に当たり、子ども学部と短期大学3学科1専攻科の一体的な活動を心がけ、とくに単位互換や他科聴講など教務的面での相互関係及び、共有することの多い諸設備の改修などでの両者の関係に目配りをしながら、学長のもとに整備した執行部が中心となって学事の円滑な進行を心がけました。

(2) 学長、副学長、教務部長、学生部長、募集対策副本部長からなる執行部会議を毎週定期化し、短期大学の4年制化、付属幼稚園舎の改築など、法人とも連携し、将来設計に関わる構想の具体化を図りました。

(3) 心理学科の4年制化については、子ども学部の中に発達臨床学科という形で、届出によって開設することの見通しが立ち、申請作業等を着実に進めました。

一方で、保育科福祉専攻に関しては、学生募集の減少が著しく、専攻の維持が困難と判断し来年度から募集停止に踏み切ることを決定しました。

(4) 短期大学保育科及び福祉援助学科が、関東信越厚生局の指導調査を受けました。保育士養成課程の保育科、介護福祉士養成課程の福祉援助学科と福祉専攻の3つの養成機関のそれについて、3日間に渡って指導調査が行われ、実習日数や実習時期、或いは実習担当者等についての指摘を受け、またそれらについての是正措置を講じるよう指示されました。調査に先立って、そして調査期間を通しては全スタッフでその準備、対応に当たり、多くの点で課題をクリアすることができましたが、上記の点などでは正が指示され、また、年度末には、その結果報告が求められましたが、指摘の点については、ほぼ全てについて対応し、結果報告を整え提出することができました。

(5) 地域に開かれた大学をめざす取り組みもさらに強め、また、他大学、教育機関との連携強化にも努めました。とくにGPとして「資質の高い教員養成プログラム」に採用された東京学芸大学とのコンソーシアムで行ったメンタリングを生かした取り組みは、完成年度を向かえ、私立大学ー私立幼稚園の連携の下に一定の成果をあげた点を中心にまとめを行いました。また、「特色ある大学教育支援プログラム」として採用された「子育て広場」を中心とした取り組みは、2年目をむかえ、学生参加の環境を整えるために単位化した科目を設け、さらに取り組みを強化し、成果をあげることができました。

また、本学の教育を広く地域に発信する活動の一環として、公開講座の開設や科目等履修による授業の開放、あるいは他大学や教育機関との連携による単位互換を進め、とくにネットワーク多摩が推進する高校生対象のチャレンジキャンパスプログラムでは、協定書を結びより強い結束の下で推進していく体制を整えました。

本学の研究・教育の成果を広く情報発信するための試みの一つとして始めた仙台、新潟、横浜での本学教員を中心とした保育・教育に関する講演会は、本年度も実施し、多くの参加者を集めました。白梅学園の知名度をあげる広報活動の一環でもあり、今後も継続乃至は拡大していくことが重要であろうと考えられます。

(6) 多様なニーズに応えるための豊かな教育内容や、それをプランニングし実践する教職員スタッフの能力の向上が求められる中、教育方法や実務能力を高めるためのFD、SDの取り組みが重視されており、それについても意を用いましたが、今年度は短期大学の

第三者評価、監督官庁による指導調査、さらには新学科開設に向けての申請作業が折り重なる中で、時間的制約が多く、結果的に1回のFD研修会しか開けませんでした。カウンセラーの助教を講師とし、学生支援体制のあり方について学び、検討を進める会には、全教員の参加を原則とし、内容の濃い会となりましたが、今後は、年度内の回数をさらに増やしていくとともに、研修会スタイルだけではないFDのあり方について検討を進め、実施していくことが課題として残りました。

(7)自己点検・評価では、今年度は第三者評価を受け、10月には、外部評価委員の実地調査があり、学長以下全スタッフで対応しました。その結果、幾つかの点で指摘を受けましたが、概ね良好な評価を得ることが出来ました。自己点検評価報告書ならびに実地調査の結果のまとめは全て公刊し、学内外に開示しました。また、教学部門の自己点検の軸となる授業評価については、演習などの一部を除いて、前後期各1回、全授業での完全実施を実現し、その結果報告をまとめ開示しました。

(8)各種実習に関する業務を統括し、また実務を担う組織である、実習指導センターの整備充実に意を用いましたが、4年制大学の実習が増える中で、現スタッフや事務体制では十分対応できないところも現れてきており、内部における指導体制の効率化とともに、人員増も含めた環境整備の面でも課題を残していると考えられます。

(9)短期大学及び大学の諸組織、諸設備等の将来像の検討については、心理学科の4大化については実現が可能となり、その準備を具体的に進めることができましたが、福祉援助学科の将来像などについてはまだ課題を残したままの状態です。また、付属幼稚園の園舎改築の問題も、短期大学の4大化と密接に関係しているため、具体化を図ることができませんでした。施設の老朽化は甚だしく、園児の安全確保の点からも着手が急がれる課題なので、今後のスケジュール化を早急に図る必要があります。

2. 教務・学生関係

(1) 学生数

平成19年度は1年生（3学科・専攻科）276名、2年生（3学科）245名、総学生数521名でスタートしました。

(2) 教育課程と教務事項

①学事日程の編成と授業週数の確保

平成19年度の学事日程は従来と大きな変更点はありませんでしたが、前年来、授業回数の15回遵守、指定科目のクラス分割等について厳密な履行が迫られるなか、とくに春季、夏季、冬季休業期間の設定などかなり難しいスケジュール管理を求められることになりました。また、新たな課題として各種実習時間の設定の仕方についても従来の解釈とは異なった実時間の確保等が要請されており、それらを仔細に検討し、学事日程の中に反映させていくことが必要となります。

②授業方法の改善と教育機器等の環境整備

より効果的な授業方法等を目指してFD等の取り組みがなされ、情報機器等を活用した授業展開の工夫が取り組まれています。他方、教育機器等の更新や設備改修の面で充実が図られる必要がありますが、補助金の採択などとの関係で十分な財政的裏づけが得られない中で、必要度の高いものから重点配備するなど、計画的な取り組みが急がれています。

③適正な入試の実施について

監督官庁から入学定員遵守が厳しく求められる中、今年度から入学者の最終調整を目的としたIV期入試を実施しました。他大学との競合関係などの入試データの蓄積がまだ不十分なこともあって、時々の入試時点での歩留まり計算など難しい局面もありましたが、最終調整の結果、定員遵守をほぼ達成した結果となりました。

入試問題の出題ミスは残念ながら今年度も幾つか出てしましましたが、いずれも合格者発表以前の修正により、大きな問題なくクリアできましたが、以後は、さらに厳重な注意を払って作成に努めるとともに、チェック体制の強化にも合わせて取り組み、さらに、入試判定教授会の開催や、合格発表日時を変更し、ミス対応が可能なスケジュールを組むことにしました。

しかし、これら出題ミスは、一部の出題担当者への過大な負担などが原因となってお

り、それらに対する抜本的な対策が検討されねばならず、今後の課題として残されています。

④科学研究費採択と事務管理体制の整備

ここ数年、科学研究費をはじめとする、いわゆる「競争的資金」の採択が増えつつあります。平成19年度は新規採択が4件ありました。今後もさらに申請件数、採択件数の増を目指していきますが、「公的研究費」の機関管理のルールや体制づくりについて監督官庁から整備の要請が来ており、それに応える形で補助金管理の部署などを適宜変更し、専門化するとともに、運用に関する倫理規程なども整備しました。

(3) 学生生活の支援

保健センター室、学生相談室などは大学学生への関わりと同様の取り組みで、学生生活の支援を行いました。短期大学学生のそれぞれの利用状況は以下の通りです。

〈保健センターの利用状況〉

| | | | | | |
|-------|------|-------|------|--------|-----|
| ・救急処置 | 616件 | ・健康相談 | 334件 | ・健康教育 | 87件 |
| ・その他 | 83件 | | 合計 | 1,120件 | |

〈学生相談室の相談内容別利用件数〉

適応障害683件、対人関係33件、家族問題19件、自己啓発11件、進路相談8件、その他6件、親利用11件 総件数 771件

学生寮（若葉寮）については、寮生の自主自立を基にした共同生活の確立をめざす必要性を感じ、寮生との話し合いを通して指導に配慮しました。

学報「プラムタイムス」（9月、3月刊行）は後援会員や同窓会全国支部にも発送され学園の近況報告とともに情報交換の場にもなっています。

学資の援助を必要とする学生が昨年度に続いて増加し、今年度奨学金の受給者は151名でした。

〈在籍数に対する奨学生の割合動向〉

平成15年 15% 16年 18% 17年 21% 18年 27% 19年 29%

3. 学生募集

(1) 志願者数の状況について

保育科は、368名の志願者があり、前年から153名減という実績でした。入試区分で見ると減少は一般入試に偏在していることから、子ども学科で保育科を第2志望とした志願者がスライド減少したと理解できます。推薦系入試に関しては前年とほぼ同数の志願があるので、子ども学科とは異なる傾向です。一般に短期大学、とりわけ保育系を志願する女子生徒にあっては、早い時期に入学を決定したいとする傾向がここでも裏付けられています。短期大学保育科に対する社会的ニーズはまだ強いものがあると推察されますが、一方で短大離れも加速しているので、今後については予断を許されない状況です。なお、新入学者は130名で厚生労働省の定員遵守に関する指導を厳守しました。

福祉援助学科は初の試みとしてAO入試とスカラシップ制度を導入しました。社会的な変化で厳しい募集環境に晒されている学科へのこ入れという背景があり、呼び水となることが期待されました。その結果、AO入試では従来出願のなかった高校を含めた14名の志願があり所期の成果を上げました。一方で指定校推薦入試への志願者が半減したことは、バイの拡大に繋がらなかったともいえます。しかし、今後指定校からの志願者増を見込むことは難しい状況にあるので、一定の成果があったという評価はできます。今後、介護福祉士資格の国家試験への移行もあり、あらたな観点からの募集対策が必要です。なお、志願者は前年比で35%減で、入学者も45名となっています。

心理学科の志願者は、前年の82名から65名と下げ幅としては少なかったものの、数年来の減少傾向に歯止めがかかりませんでした。一因として、一般入試で子ども学科第2志望の心理学科選択がゼロとなつたこともありますが、短期大学の心理学科としての存立基盤が

弱体化していることも事実として捉えられます。本学は、短期大学で唯一の心理学科という訴求点がありましたが、志願と結びつけることのできなかったことは遺憾です。今後は、子ども学科に増設予定のされる発達臨床学科にその精神が承継されますが、あらたな志願層の掘り起こしを図るなど学科安定の方策に取り組まねばなりません。

(2) 制作物について

メインの制作物である年度版「ガイドブック」は、四大版と短大版をそれぞれ独立冊子として制作しました。これは、進路指導の日程や訴求点が異なることを勘案し、機動的な対応を図るための措置です。配布先は高校、生徒、予備校、同窓会員などでしたが、その一方WEB媒体を介した直接請求も増加しつつあります。

一方、本年は新聞などのタイアップも試み、たとえば「学長インタビュー」というような形で本学の方向性や特色などを発信することにも注力しました。

(3) ホームページについて

本学は、白梅学園の名の下に、四年制大学、短期大学、高等学校、清修中学校、幼稚園が併設されていて、HPに関しても総合的な教育機関として全容が把握できる構成となっています。そのための一長一短はありますが、スケールメリットを謳える要素は看過できません。大学・短期大学ページにおいては、適時に入試案内や行事告知を実施するなどし、また更新頻度の向上に努めました。

(4) 相談会・高校内ガイダンス・出張講義について

多くの教職員の協力を得て、会場相談会（40か所）、高校内ガイダンス（88か所）、出張講義（保育系6、福祉系1、心理系4か所）等に積極的に参加し、直接、受験生に説明する機会を重視する姿勢で取り組みました。また、本学独自の高校教員向け相談会を立川、新宿、横浜、三会場で実施し、送る側受入側という双方向の情報交換ができる場として機能しています。

(5) 高等学校・予備校訪問について

広報課プロパーによる高校訪問は、地方入試の実施を踏まえ、東日本の広範な地域をカバーしました。東北81、北陸4、中部35、甲信越51、関東147校、合計281校実施しました。また、教職員の応援を得て、全学的な高校訪問を平成19年5月～6月、平成19年11月、の2回にわたり243校実施しました。11月の訪問では短期大学志願層の掘り起こしも意図しました。また、平成20年3月には、福祉援助学科でこ入れキャンペーンとして指定重点校37校への訪問を実施しました。

(6) オープンキャンパスについて

近年はオープンキャンパス参加を授業の一環とする高校もあり、募集関連行事としての比重はますます高まっています。また、数年来保護者同伴の参加も増加の一途です。これに呼応し、体験授業や予備校講師による入試対策講座、現職による職業理解の講演などの定番に加え、理事長・学長の講演会など、小規模大学の利点を生かした企画を取り入れ内容上の工夫を図りました。また、学生サポーターによる体験談や学内ツアーなど、従来以上に学生参加型のオープンキャンパス運営を目指しました。

なお、動員に関しては、7月前期の開催では台風による影響があたものの、それ以外は前年並みの数字を確保しています。

日程別参加人数は、6月10日(日)181名、7月15日(日)157名、7月22日(日)415名、8月18日(土)597名、10月7日(日)205名、11月25日(日)120名でした。

(7) 白梅学園高校との関係

併設高校と協同した、一年生対象の施設見学会、二年生対象の体験授業、学長・学科長による保護者向説明会などを実施しました。また、特別推薦合格者に講義形式の講座を1月中に3回開催し、さらに保育系の合格者については「子育て広場」イベントへの参加、福祉系にはボランティア活動への参加を課すなど実践的な入学前指導を行いました。今後も、新学科構想の説明など機会を捉えた適宜な対応を図ることを心がけると共に、白梅学園高校生への施設見学会実施やチャレンジキャンパスへの受け入れを積極的に行い、総合学園として一貫性のある連携指導をさらに拡充させていく必要があると思われます。

4. 事務組織の改善

事務部門では、平成19年度は、通常の学事、学生支援の業務に加え、第三者評価報告書の作成及び実地調査への対応、関東信越厚生局の指導調査への対応、子ども学部への新学科開設の申請作業などに力を傾注することになりました。また、それく加えて、短期大学50周年記念事業についても力を注ぎ、記念式典、記念碑の建立などを滞りなく済ませることができましたが、記念誌の刊行は一部未稿部分が出たために遅れが出てしまい、次年度に持ち越すことになってしまいました。

大学事務職員の資質向上のための取り組みとしては、各部署ごとに関連の研修会に積極的に参加し研鑽に励みました。

5. 自己点検・評価

第三者評価を受ける年度に当たって、前半期は実地調査のための報告書づくりに力を注ぎました。10月の外部評価委員を迎えての実地調査についても、万全の準備を整え、全スタッフで対応しました。その結果、幾つかの点で指摘を受けましたが、概ね良好な評価を得ることが出来ました。

授業アンケートについては今年度も演習等の一部を除いて全授業で実施しました。前期と後期に1回ずつを行い、その結果について学生に開示しています。自由記述欄については全て電子データ化して科目担当教員に返却し、より客観的に授業を評価できるように工夫しています。

授業アンケート実施状況 (実施授業科目数)

前期 7/4～7/10

後期 12/3～12/8

6. 学生人権擁護

年度当初のオリエンテーションで、各科全学年に「セクシャル・ハラスメント防止ガイドラインー相談の手引きー」を配布し、人権についての注意を喚起しました。また7月17日、全学科1年生を対象に、「加害者にも被害者にもならないためにーセクシャルハラスメントと人権ー」と題して講演会（武田万里子 津田塾大学教授）を実施しました。旧規程およびガイドラインの見直しをしました。

7. 就職及び進学の支援

今年度の求人件数は、企業関係が737件、保育所が418件、幼稚園が320件、施設関係が643件、合計2,118件ありました。卒業生数243名に対して学生1人あたり平均8.7件と高い求人件数であり、白梅学園としては大変良い就職環境でした。

そのため、就職率は、保育科が100%、心理学科が92.9%、福祉援助学科・専攻科福祉専攻がいずれも100%と大変良い結果となりました。

また、進学では、編入について40大学から指定校の依頼がありました。4年制大学へ29名が進学、本学専攻科へ8名、専修・各種学校へ6名、その他（大学院・留学）へ3名、合計46名の進学が決定しました。4年制大学への進学が63%であり、前年度（38%）と比較してその割合は大きく増加しました。

進路指導課では、学生の進路（就職・進学）支援に対して、自己の分析をはじめ、自立した社会人を目指すための講座などガイダンスの実施や、キャリアについての不安や悩みについては、キャリアカウンセリングなども取り入れ、資料や情報提供のための資料室の充実をはかっています。専任教員による英語や論文の個人指導も行いました。

8. 図書館の整備・活動

平成19年度は各学科に役立つ情報・資料の充実を図りながら、平成20年4月の大学院開設のための図書（洋書214冊・和書50冊）雑誌等の発注・整備を行いました。

設備については、あらたに地下に2台の検索用のコンピュータを設置し、利用サービスの向上に努めました。

教養科図書選定三年計画の最後の年度として、1,600冊の選定を実施し、教養科図書選

及は、ほぼ完了しました。その結果重複図書は、総計で2,819冊11,573,466円となりました。なお、平成18・19年度に遡及した重複図書1,900冊を年度末に廃棄処分しました。

また11月には、立川市若葉町在住の児童文学者、清水たみ子氏より図書・雑誌・絵画・その他資料等の寄贈を受け入れました。

花みづき第21号を発行しました。

9. 情報処理センターの活動

平成19年度もコンピュータ教育のための研究と実践活動に力を入れるとともに、情報化に対応したコンピュータ利用環境の整備のために、コンピュータ、ネットワーク機器、ソフトウェアの・維持・管理・更新に勤めました。特に今年度は、昨年度末でリース期間を終えた教育用コンピュータシステムの全面的な入れ替えを行いました。同時に、耐用年数をすでに超えているメールサーバやウェブサーバなどのサーバ類を新しいものに更新しました。

対外的には、社団法人私立大学情報教育協会の業務に、短大部門の運営委員として参加し、大学における情報教育の普及に協力しました。

また、「第7回白梅コンピュータアートコンテスト」を実施し、「白梅学園大学・短期大学情報教育研究」第11号を刊行しました。

10. 教育・福祉研究センター

教育・福祉研究センターは研究の推進および地域サービスをめざして次の事業を実施した。

(1) 平成19年研究助成

特定課題研究 大学「子どもと現代」短期大学「家族と社会」を含め、以下13件、550万（内50万円が学術研究振興資金より助成）で取り組みました。

- ①鈴木慎一郎「師範学校の保育者養成機能と音楽教育実践に関する史的研究：佐藤吉五郎『和音感教育』との関連から」〔14万〕
- ②荻野七重「言語連想における時代的変化の検討－小・中学生について－」〔48万〕
- ③金子尚弘「マウスを用いた脳の記憶機能に関する研究」〔44万〕
- ④佐々加代子（子どもと現代）「幼稚園教育における発達臨床型保育内容研究」〔38万〕
- ⑤瀧口優（子どもと現代）「公立小学校英語教育特区の分析から見た学童期の英語教育」〔20万〕
- ⑥林薫（子どもと現代）「大学における異世代交流教育授業の効果の検討『高大連携の家庭科教育の検討から』（継続）」〔15万〕
- ⑦中山正雄「児童福祉施設における家庭支援の役割が及ぼす今後の児童福祉のあり方について」〔37万〕
- ⑧佐野英司「福祉実践のあり方についての研究－獲得目標と福祉実践の関わりをめぐって（その2）－」〔15万〕
- ⑨閔谷栄子「介護福祉実践における『ホスピタリティ』の応用」〔23万〕
- ⑩西方規恵「福祉援助と『遊び心』」〔16万〕
- ⑪八木紘一郎「子ども文化創造研究『未来世代（子ども・学生たち）自身による文化創造への課題と可能性について』～『こども新文化フォーラム』企画開催を通して～」〔60万〕
- ⑫山路憲夫「『だれもがともに』 サポータープロジェクト－地域の医療機関、NPO、親の会との協働により発達障害児を支援する人材養成－『現代GP申請に基づくともにネットワークメンバー』」〔70万〕
- ⑬金田利子「子育て支援ネットワークづくりに関する研究」〔150万〕

(2) 研究年報

「研究年報」第12号を発刊しました。（平成19年7月31日）

(3) 公開講座の報告

- ①第9回 生活の中のカウンセリング 「子どもとのかかわりの基本について考える」
全5回 講師名、平木典子、岸田博、金田利子、汐見稔幸、岡健、無藤隆
参加者延人数：580名 会場：白梅学園大学
- ②平成19年度 第7回保育フォーラム 「保育変革の時代を考える」
日程：平成19年6月9日（土）
講師名：無藤隆、民秋言ほか
参加者数：203名 会場：財）津田塾会
- ③世代間交流コーディネーター養成講座
日程：平成19年8月3日（金）、8月11日（土）、8月24日（金）
講師名：草野篤子、金田利子、多湖光宗、杉啓以子
参加者数：20名 会場：白梅学園大学
実習会場：東京都江戸川区社会福祉法人「江東園」
- ④第4回家庭科の保育と保育者養成の保育をつなぐシンポジウム
「中高生とのふれあいは乳幼児に何をもたらすか」
日程：平成19年10月6日（土）
講師名：倉持清美、井口真美、大山美和子、阿部睦子、石島恵美子、伊藤亮子、
金田利子
参加人数：52名 会場：白梅学園大学
- ⑤白梅子ども学講座「子ども学の可能性－子どもたちの未来に向けて－」（子ども学研究所との共同開催）
全5回 講師名：汐見稔幸、八木紘一郎、無藤隆、小林美由紀、新堀学
参加者延人数：139名 会場：白梅学園大学
- ⑥第13回白梅保育セミナー
「いま保育に問われていること遊びを通してとらえる『現代』の子ども～家族・地域を
視野に入れて～」
日程：平成19年12月2日（日）
講師名：無藤隆
幼稚園分科会：師岡章、小松歩、明石陽子
保育所分科会：近藤幹生、佐久間路子、高田あゆみ、大橋隼人
施設分科会：中山正雄、西村章次、荒井麻紀、相田大
参加者数：73名 会場：白梅学園大学
- ⑦第6回 白梅介護福祉セミナー
「コムスン問題はなぜ起こったか？これからの高齢者介護を考える」
日程：平成19年2月3日（日）
講師：日野力、新田國夫、水谷和美、細谷英正、荻谷洋子、比留間毅浩
参加者数：55名 会場：白梅学園大学

(4) 現代GP「アートでつくる障害理解社会の創成」

本プロジェクトが文部科学省平成19年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択されました。プロジェクトには白梅学園大学・短期大学学生も参加し、ワークショップや親キャラバン隊等の取組を行われました。

採択取組名称

「アートでつくる障害理解社会の創成」

平成19年度には本取組に23,854千円が補助交付されました。

(5) 発達・教育相談室

発達・教育相談室での相談事業を再開のため、各担当、関連部署等と連携を行い受付体制の定着とともに環境、設備の整備を行いはじめた。

11. 短期大学創立50周年記念事業

1957年に開設した短期大学が、今年50周年を迎えることを記念して、幾つかの記念事業を行いました。一つは記念式典の開催で、11月4日、内外から関係者を招き、記念式典を挙行し、次いで祝賀パーティを行いました。また、同時に学園歌を刻んだ記念碑の除幕式をF棟脇で挙行しました。もう一つの事業である記念誌の刊行は、残念ながら未稿部分があつたために、この式典に間に合わず、引き続き編集を継続し刊行の運びとなつたところで、式典、パーティ参会者に郵送することとしました。

表1) 平成19年度学生在籍数(平成20年3月1日現在) (人数:名)

| | 学 年 | 人 数 |
|---------|----------|-----|
| 保 育 科 | 1 年 | 133 |
| | 2 年 | 109 |
| | 計 | 242 |
| 心 理 学 科 | 1 年 | 59 |
| | 2 年 | 65 |
| | 計 | 124 |
| 福祉援助学科 | 1 年 | 65 |
| | 2 年 | 60 |
| | 計 | 125 |
| 専 攻 科 | 福祉専攻 1 年 | 16 |
| 合 計 | | 507 |

表2) 平成19年度卒業者および免許資格取得者数
平成19年度3月卒業者(平成20年3月15日)

| | 学科および種別 | | 人 数 |
|--------|-----------------------|--------|-----|
| 卒業者数 | 本科 | 保育科 | 107 |
| | | 心理学科 | 61 |
| | | 福祉援助学科 | 59 |
| | 専攻科 | 福祉専攻 | 16 |
| | 計 | | 243 |
| | | | |
| 資格取得者数 | 指定保育士養成施設卒業証明書取得者 | | 103 |
| | 幼稚園教諭二種免許状 | | 99 |
| | 介護福祉士登録資格 | | 75 |
| | ホームヘルパー養成研修2級課程修了証書取得 | | 11 |
| | 生きがい情報士認定証取得 | | 8 |
| | ピアヘルパー認定試験合格 | | 31 |

表3) 平成20年度新入学生数(前年度比較)(平成20年4月1日現在)

(人数:名)

| | | 平成19年 | 平成20年 | 増 減 |
|--------|------|-------|-------|------|
| 保育科 | | 131 | 130 | △ 1 |
| 心理学科 | | 61 | 52 | △ 9 |
| 福祉援助学科 | | 64 | 43 | △ 21 |
| 専攻科 | 福祉専攻 | 15 | 9 | △ 6 |
| 計 | | 271 | 234 | △ 37 |

表4) 平成19年度卒業生 就職者数

| | | 白梅学園短期大学 | | | | | | |
|---|--------------------|----------|--------|-------|-------|--------|--------|-------|
| | | 本科 | | | | 専攻科 | | 合計 |
| | | 保育科 | 福祉援助学科 | 心理学科 | 計 | 福祉専攻 | 計 | |
| A | 卒業・修了者数 〔C+E+F〕 | 107 | 61 | 61 | 229 | 16 | 16 | 245 |
| B | 就職希望者数 | 85 | 55 | 28 | 168 | 13 | 13 | 181 |
| C | 就職者数 | 85 | 55 | 26 | 166 | 13 | 13 | 179 |
| D | 就職決定率 〔C/B×100〕 | 100.0% | 100.0% | 92.9% | 98.8% | 100.0% | 100.0% | 98.9% |
| | 前年度決定率 | 98.0% | 100.0% | 93.9% | 97.3% | 100.0% | 100.0% | 98.0% |
| E | 進学者数 | 18 | 5 | 21 | 44 | 2 | 2 | 46 |
| F | その他 | 4 | 1 | 14 | 19 | 1 | 1 | 20 |

* 上表には平成19年9月卒業者を含みます（福祉援助学科2名）

表5) 平成19年度卒業生 就職者業種・職種別 内訳

| | 業種 | 職種 | 白梅学園短期大学 | | | | | | 業種別 職種合計 | |
|---------|-------------|----------|----------|--------|------|-----|------|----|-------------|--|
| | | | 本科 | | | | 専攻科 | | | |
| | | | 保育科 | 福祉援助学科 | 心理学科 | 計 | 福祉専攻 | 計 | | |
| 企業・公務関係 | 建設 | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 製造 | 事務 | | 1 | 2 | 3 | | 0 | 3 | |
| | | 営業・販売 | | | 1 | 1 | | 0 | 1 | |
| | ガス | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 情報通信 | 事務 | | | 1 | 1 | | 0 | 1 | |
| | | 営業・販売 | | | 1 | 1 | | 0 | 1 | |
| | 運輸 | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 卸売・小売 | 事務 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 2 | |
| | | 営業・販売 | 1 | 1 | 5 | 7 | | 0 | 7 | |
| | | 専門的職業 | | | 1 | 1 | | 0 | 1 | |
| | 金融・保険 | 事務 | | 1 | 2 | 3 | | 0 | 3 | |
| | | 営業・販売 | | | 1 | 1 | | 0 | 1 | |
| | 不動産 | 営業・販売 | | | 1 | 1 | | 0 | 1 | |
| | 飲食店・宿泊 | 接客・サービス | | 1 | 1 | 2 | | 0 | 2 | |
| | 医療・福祉 | 事務・受付 | 1 | 2 | 1 | 4 | | 0 | 4 | |
| | 教育・学習支援 | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | サービス | 事務 | 1 | | | 1 | | 0 | 1 | |
| | | 接客・サービス | | 1 | 2 | 3 | | 0 | 3 | |
| | | エステティシャン | | | 2 | 2 | | 0 | 2 | |
| | 国家公務 | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 地方公務 | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 小計 | | 4 | 7 | 21 | 32 | 1 | 1 | 33 | |
| 保育関係 | 公立幼稚園 | | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 私立幼稚園 | 幼稚園教諭 | 16 | | | 16 | | 0 | 16 | |
| | | 臨時教諭 | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 公立保育園(公立福祉) | 保育士 | 6 | | | 6 | | 0 | 6 | |
| | | 臨時保育士 | 1 | | | 1 | | 0 | 1 | |
| | 私立保育園 | 保育士 | 55 | | | 55 | 5 | 5 | 60 | |
| | | 臨時保育士 | 2 | | | 2 | | 0 | 2 | |
| | 小計 | | 80 | 0 | 0 | 80 | 5 | 5 | 85 | |
| 施設・福祉関係 | 公立施設等 | 指導員 | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | | 介護福祉士 | | | | 0 | | 0 | 0 | |
| | 私立施設等 | 保育士 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 2 | |
| | | 介護福祉士 | | 45 | | 45 | 6 | 6 | 51 | |
| | | 指導員 | | 3 | | 3 | | 0 | 3 | |
| | | ケアワーカー | | | 5 | 5 | | 0 | 5 | |
| | 小計 | | 1 | 48 | 5 | 54 | 7 | 7 | 61 | |
| 総合計 | | | 85 | 55 | 26 | 166 | 13 | 13 | 179 | |

*上表には平成19年9月卒業者を含みます（福祉援助学科2名）

〔IV〕 白梅学園高等学校

平成19年度は、1年生264名、2年生265名、3年生329名、合計858名の生徒数で出発しました。教職員は、専任43名、非常勤講師35名、事務職員7名（5+アルバイト2）という陣容で教育に臨みました。募集状況においては、前年度からの入学者の質的向上を図るという方針に基づき、内申の基準を下げないこと、自己推薦枠を縮小するなどの施策を継続して活動しました。その結果、入学者の偏差値資料などが示すように、全体的な質の向上を果たせたと考えています。一方、量的には、学則定員の変更を踏まえた300名の確保をめざしてきめ細かい募集活動を行ってきましたが、入学者は264名となりました。これは、結果として上位層併願者の歩留りが低かったためと考えられ、学校評価が上がる課程において避けられない現象です。これについて付言すれば、近年は日常の生活・学習面での教育的成果の向上や高い進学実績などが認められ、外部からの本校に対する一定の評価は得られています。

1. 学校運営

日常の教育活動は、各分掌の担当者により円滑に学校運営を進めることができました。また、通常の分掌組織のほかに、当面する緊要の課題解決を目的として設置した、特別委員会も有機的に機能しました。学校改革について、目に見える学力の向上をめざし、授業の充実、生活面での指導の統一の徹底、生徒の自主性のある行事への取り組みの指導、教員の学内・学外の研修等を実施しました。また、全体で共有している教育目標の具現化は、日々の実践の中で一步一步着実に成果が上がってきました。中でも18年度入学の43期生の特進コースでの偏差値の向上は著しく、これが進路実績に結びつくような指導結果が期待されます。また、募集において基準を上げた成果もあり、質の高い生徒が入学しています。したがって、生活指導上の問題は1、2年ともほとんどなく、退学者数も1年5名、2年3名、3年1名という低水準に留まりました。なお、42期生の進学実績は、国公立、難関私大にも一定数の合格者を出すなど好調であり、四年制大学への進学率もはじめて50%を超えるました。

(1) 教務・学習指導

①学習指導の充実

学習指導担当者を中心により、よい授業、生徒の学力の向上のため、授業計画・方法の検討等を、教科会、教科主任会の充実を図りつつ、全教科統一した取り組みをしてきました。また、清修中学との時程、施設、行事等両校間の話し合いも定期的に行い双方の教育活動は支障なく行われました。

〈1〉重点目標でもある「学力向上」のために進路指導部とも連携をとり、次のことを実施しました。

(ア) 1年進路マップ、スタディーサポート（1年2回、2年2回、3年3回）進研模試（1年3回、2年3回、3年1回）を必須で行ってきました。また河合塾模試（3年7回）を大学受験者（白梅学園大学を含む）に必須化し、結果を1人ひとり分析し、実力向上をめざしました。

(イ) 講習、補習については、成績不振者は指名補習を、受験希望者には夏、冬、春期講習を実施し、3年生入試直前講習をセンター試験対策を目的として実施しました。また夏には校内で3泊4日で勉強合宿を行いました。

(ウ) 生徒の進路先を見すえて、モチベーションを高めさせ、学習到達目標の設定、実施、点検を各教科、各学年で行ってきました。

〈2〉生徒の授業評価による授業の自己点検は、各学期毎に全教科、全クラスで実施しましたが、質問内容については教科独自のものを加え、結果の集計をコンピュータ化しました。なお、評価は記名とし、実施時期は1学期中間後に行い期末までの授業に生かせるようしました。これにより、各教科の中で結果を踏まえての議論を深め、意見交換・検討をし、授業の改善の指導に反映してきました。

＜3＞進路面談週間を設定し、それに向けてスタディーサポートに関する研修会を実施しました。1学期は6月に1週間全学年で実施、スタディーサポートの結果を用いて、パソコンを利用した面談を実施、生徒の弱点の強化、学習習慣の定着、進路に向けての取り組みの指導などをしました。

＜4＞保護者対象の公開授業を実施しました。年間行事予定表に入れ、多くの保護者にみていただくようにしました。参観された方からの意見・感想もいただき以降の授業、生徒指導に反映することができました。開催日は1学期は土曜日、2学期は火曜日に実施しました。

＜5＞生徒の力の「のび」について目に見える結果を出すため、19年度も数値で表わした定量的な目標を立て、全生徒が確実に向上的に向上する取り組みをしてきました。特別選抜コースはかなりの成果が現れましたが、他方進学コースの指導、結果はいま一歩の感がありました。今後、さらなる注力でモチベーションを上げていくことが課題と思われます。

＜6＞総合の時間はオリエンテーション合宿に始まり、コミュニケーション能力の開発育成、テーマ学習、自分史、職業インタビュー、進路学習等を展開し内容的にも充実してきました。

②特別選抜コース発展特別委員会

別枠募集による1年、2年の特別選抜コース（クラスS、クラスG）目的達成と一層の発展のため、各担任の指導、教科の指導の問題点の検討、個々の生徒の問題点や弱点教科など洗い出し、対策を考えてきました。3年（42期）の特進コースに対してはこここの生徒に対しての対策が立てられ、結果がでたと思います。また、1、2年生のS、G、選択クラスの入れ替えなどの検討・指導が学年との関係もあり厳しさに欠けた点が課題とされています。

（2）生活指導

教科指導と並んで生活指導、教科外活動（HR、行事、クラブ等）の重要性を認識して、生徒のわずかな変化を早く気づくアンテナの感度を上げ、適宜適切な指導を行ってきております。生活指導部長・学年主任を中心に先生方の温かなきめ細やかな指導により、生活指導の全般においてよい結果になっています。生徒会主体による学校行事（新入生歓迎会、体育科の行事、合唱コンクール、白梅祭、弥生祭）は、生徒の自主運営の形も出来つつありよく取り組んで目的を達成していました。生徒の精神面での不安定等の問題傾向もやや落ち着いて来たと思います。また、生徒の服装のだらしなさや生活面での問題等が募集にも大きく影響をすることを勘案し、制服の着装（第1ボタン、セーター登校禁止など）茶髪などについての指導を徹底いたしました。

①合唱コンクールは生徒会の合唱コンクール実行委員を中心に早い時期から取り組み、達成感を持たせられる行事としての位置づけです。また合唱の完成度も高い仕上がりで、よい結果でした。

②白梅祭については総合の時間と関連させ、各学年テーマを決め取り組みましたが昨年同様生徒側の自主性が不足していた部分があったかと思われます。今後、参画意識をどのように涵養するか課題となりました。

（3）進路指導

総合に時間の取り組みと関連し、一年次より将来の夢を広く、高く設定させ、達成させていくために「職業インタビュー」「先輩の話を聞く会」「白梅学園大学・短大の説明会、施設見学会」などのイベントを充実させました。職業インタビューでは立教大学でジェンダー論を講じてる卒業生の佐野麻由子氏に全体講演を依頼し、その後、医師、保育士、栄養士、看護師として社会で活躍中の諸先輩のお話を伺いました。生徒はさまざまな職業の世界を垣間見ることができ、将来への夢を羽ばたかせるきっかけになりました。また、白梅学園大学・短大への進学希望者へは、より深い理解を促進するため保護者対象の説明会を実施しました。さらに、生徒対象には汐見学長の講演、大学・短大の先生方からは模擬授業などを受ける機会を設けました。

今年度の卒業生42期生は314名でした。進路状況は別表のとおりですが、白梅学園短大

には41名、白梅学園大学には42名、その他の四年制大学には142名が進学をしました。これにより四年制大学への進学者は56.4%となり、はじめて50%の大台を超えるました。この進学率の上昇は、特選コースはさることながら、進学コースの文Ⅰ、選抜クラスの他大学受験層を増やしていったことの反映であると思われます。特進コース、進学コース（選抜・文Ⅰ）の合格実績は国公立大、難関私大とかなりの成果がでました。これは、四大進学者への河合塾模試の義務化やセンター直前対策、生徒の学力分析などの受験対策指導がよい結果に結びついたと思われますが、他方センター後の受験指導（自宅学習中）、理系進学の強化不足、国公立への一般受験実績不足など課題も残りました。19年度の反省点を踏まえ、今後生徒間にライバル意識を持たせ、目標を高くし、早い時期からの意識作り、授業担当者、担任・学年集団のチームワーク作りが必須であり、また保護者の意識も高め、よい成果を出していくべく取り組みを強化していきたいと思います。

◎白梅学園大学・白梅短大への進学について

白梅学園大学進学に関しては、選択科目的指定や河合塾模試の義務化など進学後のことにも考えての指導や、各自の適性の理解、教師の指導もあり、希望者の早い時期での成績も含めた意志決定率は高くなっています。短大保育希望者の決定率が低いのは成績基準によって進学できない層が多いためと思われます。事実、評定平均値が2.9～3.1程度の生徒は、専門学校を含む他大学・短大へ進学せざるを得ない状況があり今後の課題となっています。

なお、大学子ども学科に学科増設構想があり、大学側から保護者対象の会合上で内容について説明を受けました。

（4）保健室の充実

利用が増加傾向にあり、精神面で悩みを抱えた生徒が多く来室しています。このため、担任との連絡を密にする同時に、各学期ごとに利用状況を教員会で報告し、情報の共有化を図りました。また、「保健室だより」をなどを通じて情報発信と提供に努め、生徒自身で健康管理を行えるよう啓蒙活動を実施しました。なお、中高保健室として今後さらなる連携と機能向上をめざします。

（5）修学旅行

19年度43期生の修学旅行はオーストラリア・シドニー、沖縄・石垣島、京都・神戸の3方面で実施しました。どのコースも大きな問題もなく生徒の満足度は高かったとのアンケートの結果がでました。ただし、海外コースでは急激な円高に伴うコスト変動が発生したのは想定外であり、今後の留意点としたいと考えています。なお、44期生より三年間の修学旅行計画を見直した結果、あらたな委託業者と方面（シドニー、西表・石垣島、四国関西）が決定しました。

（6）その他

①朝読書の実施

朝読書を実施して5年目となります。朝の10分間の静かな時間の効果は大きなものがありました。時間の確保のためHRの前に実施し、ほぼ全員が「本を読む」ことが実行できています。また読んだ本でよいものを図書委員が「おたより」で紹介するなどしました。

②カウンセリングルームの充実

利用者の増加にともない、週3回開いています。精神的な不安定者、問題のある生徒（保護者）の対応に学年とも協力して、問題解決の方向を試行模索してきた結果、不安定な生徒もやや減少しつつあります。

③春に実施しているイギリス（カンタベリー）の語学研修は、2回とも無事に終了しました。参加者1回目33名、2回目12名でした。

④夏に実施している15日間のニュージーランド（クライストチャーチ）語学研修は、1年ぶりの催行でしたが16名の参加で終了しました。

⑤かるた大会は1年の学年行事であり、学年で百人一首を暗記することに取り組んだ結

果、暗記テストの平均点で高得点を得たクラスが大会でも好成績を収める結果となりました。

2. 生徒募集

平成20年度入学生（45期生）は、入学定員を340名として募集を行ってきました。前年度の反省を踏まえて、AⅡ推薦試験（単願の自己推薦試験）の一部に、考慮枠を拡大したAⅡ特別枠推薦試験（各中学校から1名に限る）を導入しました。その結果、単願の希望者が増え、入学者は去年より増加し282名となりました。今回、特徴的だったことは進学コースの単願希望者数で、はじめて総合クラスの方が保育系クラスを上回りました。原因を分析し、次の募集活動に生かしていきたいと考えています。一方、特別選抜コース（クラスS・クラスG）及び進学コースの選抜クラスは、偏差値も高い生徒が集まり、今後の進学実績の伸張につながることと思われます。また、ランクアップ受験者の人数も依然として増えています。募集基準の底上げによる生徒の質の向上は、高校生活に対する目的意識の高い生徒が集まるということです。副次的効果として不登校等の問題による退学者を減らすことにも寄与できたと考えます。

(1) 募集企画部は、渉外担当を8名おき、募集業務の中心として任務に当たりました。これに加えて、渉外担当協力員を5名おき、中学校訪問、入試相談の協力をしました。常に募集企画部内で情報の交換や、中学校、塾への対応の検討などを細かにしてきました。なお、共働き家庭の参加を考慮した夜間入試相談会は、大変好評でした。

(2) 広報活動の充実を図るため、ポスターを体験入学告知用と学校説明会告知用の2種類、リーフレットを5月に、ガイドブック・学校紹介ビデオを8月に作成しました。また、ホームページは学校生活の日常をタイムリーに伝えることに重点をおき、更新頻度を高めました。

(3) 奨学金制度については、この制度を利用して入学する生徒も増え、特別選抜コースの入学者の増加とレベルアップにつながってきました。また在校生に関しては、学習への取り組み姿勢、生活態度、校内の成績、全国模試の偏差値などをもとに、奨学金委員会で一人ひとり支給基準の見直しを行いました。

3. その他

(1) 平成19年度「研修録29号」を4月に刊行しました。
(2) 陸上部の下山友里（3年）は、10月、秋田県で開催された国体に出場し、三段跳び種目で6位入賞、また日本ジュニア大会（10月、大分）では大学生を含んだ中の三段跳びで第3位入賞という好成績を修めました。
(3) 秋田中子校長は、平成19年度東京都教育功労者として表彰を受賞しました。

〔V〕 白梅学園清修中学校

開校2年目は、1年生76名（3クラス）、2年生57名（2クラス）、計133名の生徒数でスタートしました。多摩地区では依然として生徒獲得競争は激化の一途を辿る中、志向としては既存の学校の進学実績や過去の評判などで学校選択がなされる傾向が根強く残っています。そのような状況下で入学生確保を果たすためには、他校にはない全く新しい取り組みとその教育活動を通しての、在校生と保護者の満足度を高めることが必須条件となります。そして本校の取り組みは大きな注目を浴びており、平成20年度入試に向けては、1期生及び2期生保護者の「口コミ広報」のみならず、本校の紹介をして下さった新聞や雑誌のパブリシティ、Webサイトの相乗効果により募集基盤が拡大し、3期生68名の入学者を確保できました。これは、本校の2年間の取り組みが評価され、大きく反映されたものと思います。大手進学塾の偏差値も年々上昇傾向にあります。

1. 学校運営

(1) 教務関連

①シラバス

6年間のグランドシラバスに基づいた年間、タームシラバスを生徒、保護者、塾関連等に配布しました。こうすることで、担当教員もそのタームごとだけの視点での指導ではなく、先を見据えた指導を行っていく養成にもなりました。そのことが、生徒への学習指導にも生かされ、今学んでいることが将来どのようにつながるか、役に立つかの指導まで含めて授業を行いました。また、今年度もより一層教員の授業の質向上のために、一般への授業公開も行いました。さらに、授業評価アンケートを実施することで、実際に授業を受けている生徒の受け止め方を教員にフィードバックし、授業の質向上だけではなく生徒への接し方や受け止め方、自身の不得手とするところを理解し、それを克服するよう努めました。

②国語・数学・英語の取り組み

月・火・水・金曜日は午前中、65分授業を実施しました。中学2年生は午後も65分間で授業を行いました。木曜日と土曜日は50分授業で2時間連続の授業も実施し、特にこの2時間連続の授業では論理的思考力の育成指導を行いました。授業内容を「導入」－「展開」－「まとめ」というように毎時の指導案を作成し、指導にあたりました。数学、英語については1クラスを半分に分割し、きめ細かな指導を行いました。英語検定2級（高卒レベル）1名、準2級（高校半ば）3名、3級（中卒）13名、4級（中学半ば）65名、数学検定準2級（高校1年修了レベル）7名、3級（中卒）26名、4級（中学半ば）65名、漢字検定は2級（高卒レベル）3名、準2級（高校半ば）4名、3級（中卒）42名という成果をあげました。

③社会・理科の取り組み

社会科は昨年度以上に電子ボードを最大限に活用して、パワーポイントを中心に映像やWebを駆使し、生徒の興味関心を高める授業を展開しました。特に英国研修前には英國の歴史や文化などを分かりやすく展開する授業を行いました。そのため、英國での活動やリサーチも計画的に行うことが出来ました。理科は「体験」をテーマに「カルメ焼き」、「科学技術館体験学習」、「望遠鏡作り」、「鶴頭の解剖」、「煮干しの解剖」のように、実際に手を動かして実験することを多く取り入れる授業を展開しました。素材も身近なものを取り上げることで、関心を高めるよう努めました。結果、実験を楽しみにする生徒が増加し、理系志向へのきっかけとなった生徒も増えました。

④芸術教科・保健体育の取り組み

美術はエリアコラボレーションと連動する形で、様々な作品に挑戦しました。特に紙粘土を使った作品は、生徒それぞれの感性が表現され、躍动感ある作品に仕上がり、武藏野美術大学教授や来校された学校関係者などからもとても高い評価を得ました。音楽では合唱を中心に行い、11月には白梅幼稚園で園児に歌と劇を披露し、1月には老人福祉施設を訪問し合唱を披露し、交流を行いました。また、校外での芸術鑑賞の機会も取り入れ、6

月には六本木の国立新美術館で「モネ展」鑑賞、7月には「ライオンキング」観劇、10月には鷹の台中央公園でスケッチ大会を実施し、生徒たちの感性を高めるプログラムを行いました。

⑤論理・表現力の強化

国語科を中心に、各教科でのレポート作成及びプレゼンテーションを重視し、論理的文章の作成、自らの考えの表現力を強化しました。英国研修リサーチペーパー、英語スピーチ&プレゼンテーションコンテスト、数学未来予測プログラムプレゼンテーションなど、成果を文章で表現するだけでなく、発表するという機会を他教科と連動して行いました。

⑥キャリア学習

国立天文台ハワイ観測所で研究をされている研究員の東谷千尋先生にお越しいただき、最先端の研究活動の話を中心に、学ぶ楽しさ、知る喜びを講演して頂きました。

⑦体験学習・異文化学習

ホンダ発見体験学習や英国研修などの校外学習を通じて、自然な形でより広い視点・視野を持つ活動を行いました。3週間の英国での生活は授業に参加するだけでなく、午後のアクティビティにも参加し、他国の生徒とも交流を深める活動を行いました。そしてこのことが英国だけにとどまらず、日本に帰国してからの普段の生活の中でも、周囲に対しての気配りや配慮が細やかに出来るようになり、また担任と保護者からのメッセージを帰りの機内で渡すことで、自分たちのおかれている日常が恵まれていて、いかにありがたいかという感謝の気持ちを強くすることが出来ました。

⑧セルフ・ラーニング・タイム

放課後、生徒が自主的に残って学習したり、レベルごとの講習を受講したり、学習に対する意識の向上が図されました。また英検、数検、漢検といったこれらの検定への挑戦が生徒の学習ペース作りにも役立ち、自分で目標を立て、それを乗り越えていくという学習習慣に繋がる結果を導きました。このため放課後の時間を有効に活用し、検定対策だけではない学習のきっかけとなり、セルフ・ラーニング・タイムにおいて、授業の質問や開講されている講座に積極的に足を運ぶなどの、前向きな学習姿勢の育成の起因となりました。

⑨エリア・コラボレーション

美術・弦楽器共に参加者も多く、活発な活動が見られました。弦楽器の活動では国立音楽大学の教授からも高い評価を得ました。また、新たに囲碁と茶道も増やしました。囲碁は20名前後、茶道は50名前後が参加して、エリア・コラボレーションに対する積極的な参加が見られました。エアロビクスもダンスの要素を取り入れ、参加者が増加しました。

(2) 生徒指導関連

①スチューデント・ハンドブック

生徒が抱える不安を解消するツール、そして日常の記録を教師に伝える上での言葉づかいや相談事などを記入し、それを担任が読んで不安を取り除くという使用法において、非常に大きな効果を上げることができました。そのため、普段の生徒の生活が安定していくことにつながりました。また、ホームルームでの生徒への伝達事項を削減し、さらに生徒自らが掲示板を見てメモをとるという方法を用いて、受動的な情報入手から能動的な情報活用を目指し、実現することができました。また、毎日の生活の記録を作りそれを担任に提出することで、担任と生徒とのコミュニケーションツールとしても重要な機能を果たしました。

②保護者連絡システム

保護者や生徒との連絡、年間予定表の表示、電子新聞を通じた学校からの情報発信と最大限の効果を引き続き上げることができました。外部広報上でも認知度がさらに高まり生徒募集にも絶大な威力を発揮しました。

③食育指導

大学生協の協力の下、年間を通しての食育活動を毎週実施することができました。学食とデリバリーのお弁当を利用することで2学年同時に実施できる方法を探り入れました。保健便りと連動して食文化への意識を高めることや、食事のマナー指導も実施しました。

2. 生徒募集活動

60名定員に対して、68名の入学生を確保でき、開校2年目の活動としては順調に進めることができました。

(1) 保護者説明会

他校とは違う学校説明会のスタイルを貫きました。年々大きな反響を呼び、効果的な説明会となりました。説明会を補足する形で開いた個別相談会や、夏期のミニ説明会も好評で、入学者確保へつながりました。

(2) 学習塾広報

在校生保護者の口コミや、在校生の出身塾訪問の影響で評判が評判をよびました。学習塾からの問い合わせも増加傾向にあり、塾対象説明会でも参加者が増加しました。学習塾主催の説明会でも、保護者の来場者数が2倍以上に増えました。

[VI] 白梅幼稚園

平成19年度の保育は、3歳児4クラス（55名）4歳児3クラス（74名）5歳児2クラス（61名）総園児数190名で開始しました。

1. 園運営について

(1) 保育について及び保育者の資質・保育の質の向上

〈基本姿勢〉

“どの子ものびる” “一人ひとりをていねいに見ていく”ことを中心において、保育を開いてきました。その保育の周知に教職員が一丸となって努め、周辺地域の保護者からの信頼に応じてきました。保護者と教員との対話、教員同士の連携を基本に、子ども理解・親理解と各々の立場からの対応をすすめ、カリキュラムの工夫にとりくみ、保育の質の向上をめざしました。激動する時代の中、その子どもの生活の充実は、活動やあそび、課題へ意欲をもって自分からとりくむ姿勢と、友達と折り合いをつけて一緒にとりくんでいる力の育ちを大切にしてきました。

〈研修・研鑽〉

①園内研では、実践の話し合い、視点の整理、文献の読み合わせをし、子どもの生活の本質を探り、白梅幼稚園の教育を教員間で明確にし、共有化することに努めました。

②合同研究会(幼稚園・保育園・大学・短期大学)では、1回目「幼稚園教育要領の改訂の視点とこれからの保育について」大学より講義をいただき、2回目3回目は「目の前の子どもと保育について」幼稚園保育園の事例研究をしました。

③他園参観をし、教員間で子どもの生活や環境について話し合いをしました。

④とりくみのまとめ『白梅の保育№3』の発行『№4』にむけて各々が自分の担当・クラスで視点をもって保育にあたり、年報へのまとめとし、自己研鑽の機会としました。

⑤夏期研究会他

教員は、各々研修会の機会をとらえて参加しています。夏期研究会の内容については、まとめをして報告会で共有しあっています。

時代、制度の変化の中で、幼稚園教育要領のあり様を学び、現状を考えあうと共に、園舎建設にむかって、教員間で今後の保育についての検討をすすめました。

(2) チーム保育

子どもの状況に応じて保育補助の配置を整え、集団生活に困難さを抱える子どもへの個別の対応と全園児の健康・安全面の配慮をし、保育にあたりました。クラス担任、フリー保育者、保育補助、各々の役割を認識し、各々の立場からの保護者対応も行ないました。その結果、室内・外あそび、子どもの活動の安定した営み、成長へつながりました。教

員同士の連絡・呼びかけを意識し、フリー会議も設け、特別に対応が必要な子どもの様子や位置づけの仕方についても共有をしあっています。今後も各教員と教員間の力を高めあい、特別な支援が必要な子どもへの細かい計画もすすめています。

(3)保護者へのサポート及び関係機関との連携

保護者からの相談は、在園、未就園、他園、卒園後の保護者から多様にもちかけられます。子どもの発達、成長に関して、クラスのこと、梅の実会のこと、親同士のつきあい方、子育て、家庭内のやりくり、進学先のこと等、内容は多岐にわたっています。幼稚園としての役割をふまえ、個別なケースへの支援はもとより、子どもの育成・支援にかかり、専門性を発揮していくよう努めています。保護者へ専門機関や相談窓口の紹介をし、関係機関とのケース会議、連絡会議への出席もしました。

大学の発達相談もそのひとつです。白梅幼稚園が地域の中で、信頼をもって位置づくことに結びついています。しかし、集団生活に困難さを抱える子どもの受け入れ、保護者の要望には希望どおり応じきれない現状があり、その場合は、方向性について一緒に考え方をしています。毎年、個別な相談・話しあいは増加しています。

(4)保護者との連携

教員と保護者との対話をしあい、子どもの園生活での成長も伝え、保護者が子どもの育ちを実感できるようにむけています。梅の実会は、母親が自主運営の場として、サークルや活動へとりくんでいます。幼稚園は、親の自主運営の調整、親の声の反映のすじ道への協力、母親の活動の支援を役割として携わっています。保護者と共に子どもの生活を支え、共に、成長しています。

梅の実会主催 梅の実まつり 10月30日(火)
梅の実会企画 食育『白玉団子づくり』 12月13日(木)

(5)預かり保育(にじ組)

平成19年度は、専任体制3年めとなり、親子の支援へのとりくみを深めました。預かり保育では、仕事をもつ母親のみならず、家庭内の悩みや子育ての困難さを抱えている保護者の利用、障害をもつ子どもの受け入れなど、各々の家庭の事情による利用の仕方が多様になっています。預かり専任教諭と他の教員との連携により、長時間生活する子どもの各々の様子と保護者の様子を把握し対応に努め、時間や状況に応じて人の配置にも配慮しながらすすめました。さらに、希望者による面談の実施、定期的なおたよりの配布などもし、家庭的なとりくみの様子を保護者へ伝えて、孤立しがちな親子を支えるとりくみをしました。今後もあそび環境への工夫、計画もし、幼稚園ならではの支援と子どもの充実にむけての整備をすすめます。

平成19年度の様子

| | | | | |
|------|-----|-----|--------------|-----|
| 利用平均 | 4月 | 34名 | そのうち早朝からの利用者 | 19名 |
| | 5月 | 37名 | | 23名 |
| | 6月 | 38名 | | 24名 |
| | 7月 | 36名 | | 23名 |
| | 8月 | 28名 | | 14名 |
| | 9月 | 42名 | | 27名 |
| | 10月 | 38名 | | 26名 |
| | 11月 | 39名 | | 27名 |
| | 12月 | 31名 | | 22名 |
| | 1月 | 32名 | | 21名 |
| | 2月 | 36名 | | 22名 |
| | 3月 | 33名 | | 22名 |

最多 49名 (6月7日, 10月25日) 最少 6名 (1月4日)

早朝最多 32名 (7月23日, 10月25日) 早朝最少 5名 (8月17日)

(6) 地域とのかかわり・子育て支援事業

幼稚園への地域からの要請、幼稚園のセンター的役割を考え、教員が各々の立場で幼稚園教育の充実とあわせてつとめました。

①親子であそぼう・たねの会

・小平福祉会館 5月19日（土）
市内子育てサークル「きらら」と共催であそびの広場開催
参加者 98組

②未就園児をもつ親子のためのワークショップ「ひよこの会」・園庭開放

ひよこの会 全16回 園庭・園ホール
園庭開放 全15回 園庭
登録者 141組 体験・見学者 29組 各回の参加者平均 39組

親子が子どものあそび場として安心して利用できると来園される人が多いです。親子の関わりと子どもの成長を促す場となりました。地域の親子が白梅幼稚園に親しみをもち、幼稚園の理解につながるよう今後もすすめていきます。平成19年度は、大学・短期大学の学生が子育て広場(GP)で、数回かかわりました。附属ならではの機能を考え、学生にとって親子にとって、触れあう場の提供をしていきます。

③未就園児 2歳(3歳)のクラス「ぴよぴよ」

ぴよぴよ 全59回 預かり保育室を使用・園庭

平成19年度は、未就園のクラスを週1回～週2回・9:30～11:30の時間で実施いたしました。子どもが園に慣れていく姿、子どもの成長を親が感じ、子育てを考える場を担当教諭ともつことができました。子どもが園で過ごす間、親も気持ちをかえて、ほっとするという声もありました。子どもへの支援、白梅幼稚園への教育の理解につながるので、さらに工夫していきます。

④白梅講座

6月1日（金）～ 6月22日（金）までの毎週金曜日 全4回

内容：白梅幼稚園の保育
・心と体のつながり
・わらべうたと生活
・親・保育者・子ども
・子どもがひとりだちするとは

幼稚園の教諭が交代で話しました。

⑤子どもと親を考える講座

9月7日（金）（台風のため11/16に実施）

～10月5日（金）までの毎週金曜日 全5回

内容：子どもと親を考える
・子どもの心、親の心
・家庭の中の子ども
・子どものもつ底力(今の子どもと昔の子ども)
・異世代のかかわりについて
・子どもの思考力と生きる力

幼稚園の園長・副園長・外部講師でつとめました。

⑥講演会

10月23日（火）『今の子どもに必要な力とは』 汐見稔幸教授（白梅学園大学長）

講座・講演会をとおして、親同士の共感、子ども理解、白梅幼稚園の教育への理解をし

ていただき、子どもを支える親の活動へも目がむいていく保護者の姿がありました。

⑦地域にむけた保育参観

10月10日(水)、11日(木)、12日(金)

平成19年度は、一日体験入園を設け、未就園の親子へ幼稚園の教育内容の体験(造形・わらべうた・体操とあそび)を実施しました。

一日体験入園 9月29日(土)

⑧おやじの会

幼稚園主催 6月9日(土)、1月26日(土)

おやじの会主催 小平一小文化祭 11月25日(日)

おやじの秋祭り 9月1日(土)

卒園おめでとうの会 3月1日(土)

その他にもO Bのつながり、ネットワークによる活動や呼びかけの発展がみられ、お父さんの子育て参加、発揮、充実が広がっています。

⑨交流

地域の公立中学校からの要請、卒園生からの依頼、清修中学校との話しあいのもと、平成19年度は、子ども達にとっても異年齢の人々と触れあう中で、様々な人とかかわることや文化に触れる機会をもちました。

中学生職場体験 小平五中 9月19日(水)、20日(木)、21日(金) 5名

小平四中 2月13日(水)、14日(木)、15日(金) 3名

高校生職場体験(明星学園高校より) 8月21日(火)、22日(水)、23日(木) 1名

清修中学校2年生(全クラス)訪問 音楽のとりくみ 12月4日(火)

高齢者デイサービス オリーブとの交流 1月15日(火)、3月13日(金)

紙ひこうきづくり、笛の音を聞く 各回5名の方

2. 大学・短期大学との連携

(1) 子育て広場(GP)への協働のとりくみ

園庭開放へ学生の受け入れをしました。学生の授業とのかねあいのためか、学生の参加者は少なかったのが残念でした。

(2) メンタリング(教員養成GP)への協力・協働

メンティー(学生2名)を受けて、担当の教員はメンターとしての役割を学びました。

(3) 現代GP(アートでつくる障害理解)への連携

(4) 大学・教育との連携

①食育のとりくみ

②実習の受け入れ

③ゼミ・授業・研究への協力

3. 園児募集

応募者は、3歳児58名、4歳児12名、5歳児3名で、総園児数としては、前年度同様でした。小平西地区の就園対象年齢の子どもの減少は、さらに続きます。幼稚園教育要領の改正など、教育が激動する時代の中、白梅幼稚園の教育理念を多くの方に知ってもらうために、教員一同が力をあわせて努めた年でした。今後も魅力ある園づくり、実践をし、広報活動にもますます力をいれていきます。